

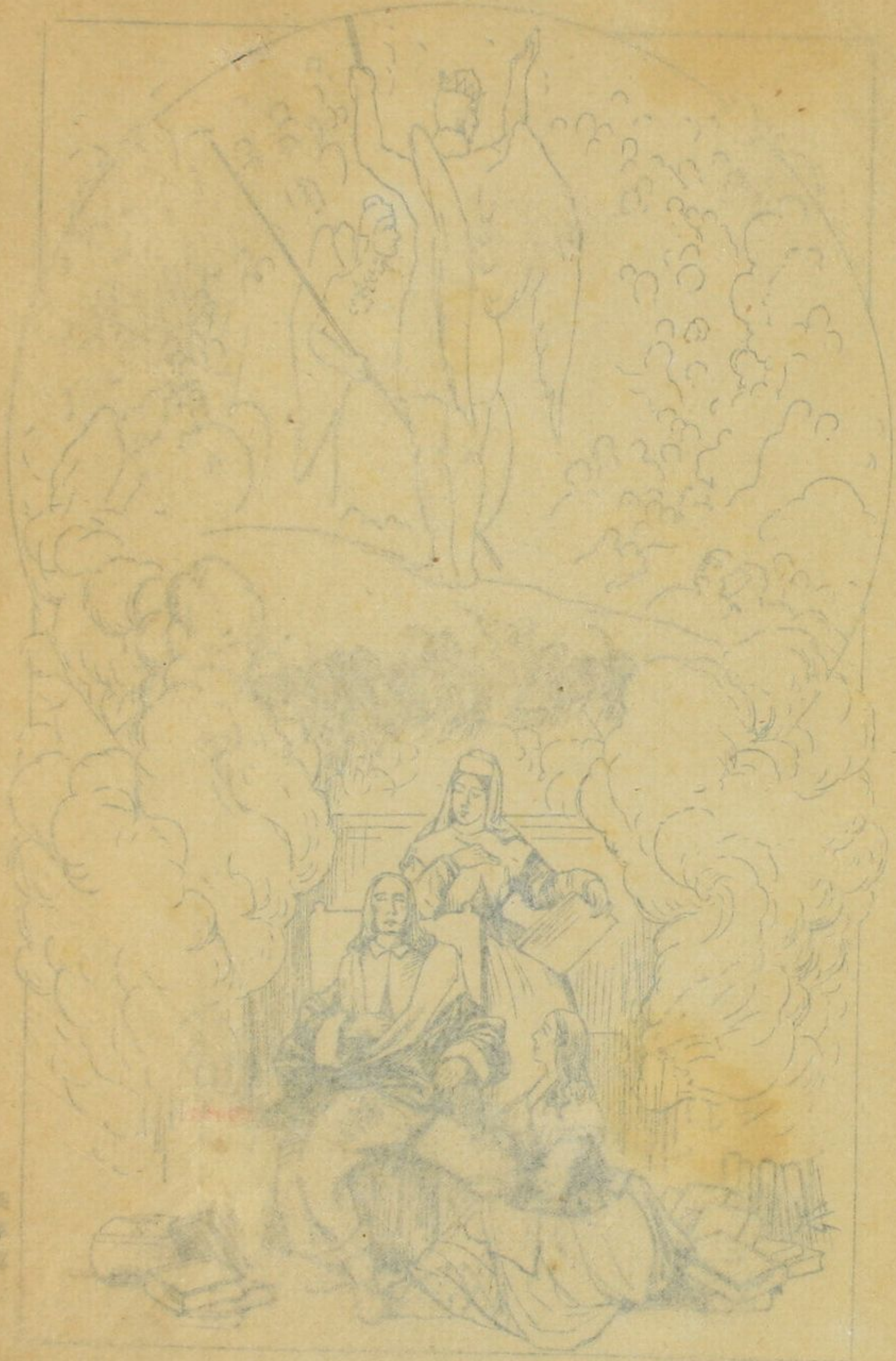
音 詩 人

Three poets in three distant ages born,
Greece, Italy and England did adorn ;
The first in loftiness of thought surpasset ;
The next in majesty ; in both the last.
The force of nature could no further go :
To make a third, she joind the other two.

Dryden,

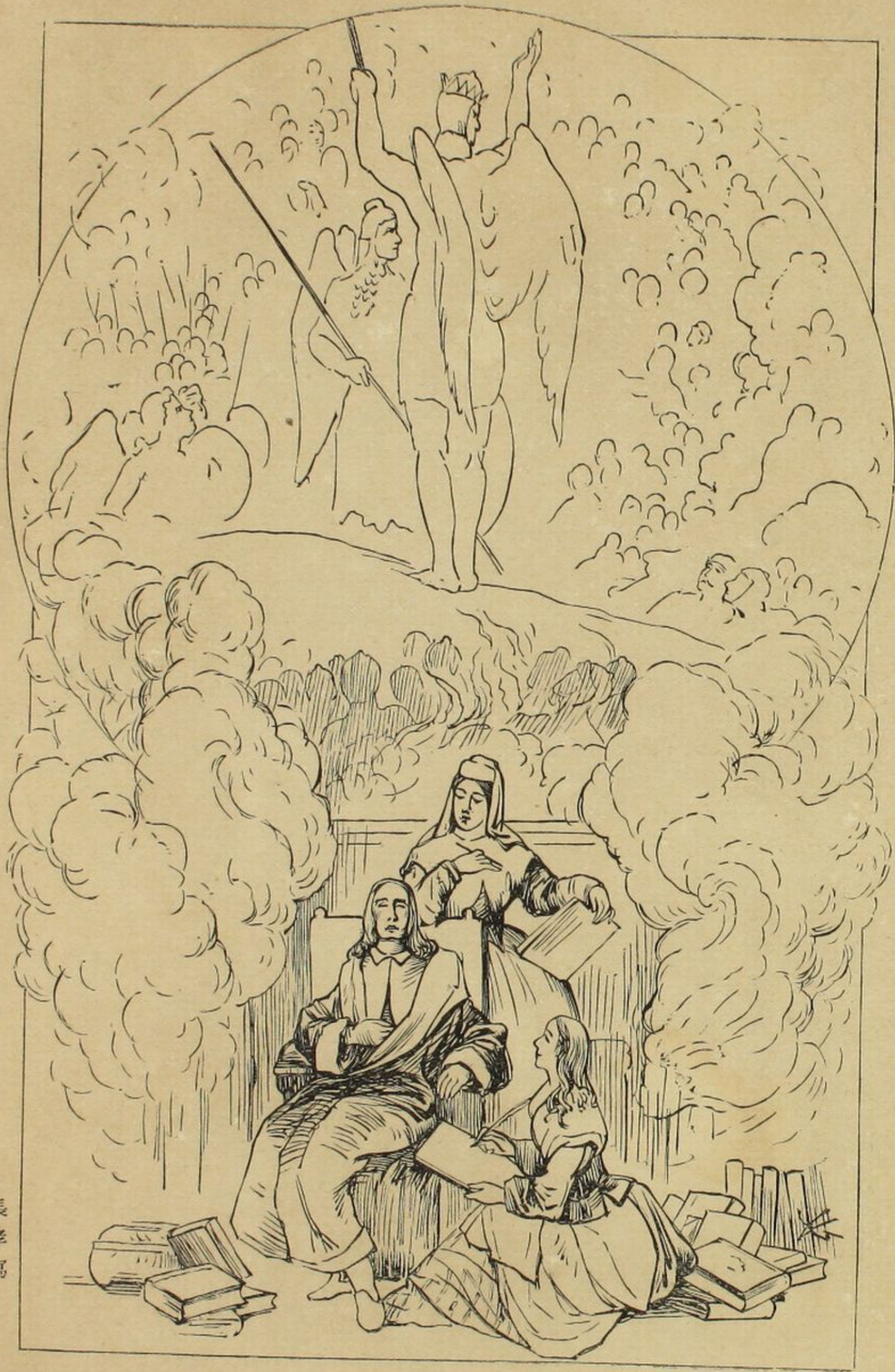






五
五

五



長孝寫

東京
中
日本
1613

西
十
四
頁

讀者に

一料は之れを英國諸家の「ミルトン傳」「英國史」「英國文學史」及び「ミルトン集」より取れり。然れども誤謬の責は固より著者にあり。
一「自由出版論」を始め他の散文「極樂墮落」を始め他の詩詞等を細説せんには、少くとも別に冊子を成さざる可らず、故を以て此處にはただ簡略に従へり。
一同人中、英文學に精通するの士少からず、然れども敢て校訂の勞を托せず、非難の聲を頌たんを恐れてあり。

明治二十七年五月

別 天生

盲詩人目次

ミルトン時代に於ける英國形勢の一斑	一	丁
年少時代	十一	丁
年表	十一	丁
家系、家庭	十三	丁
學校	十六	丁
ホルトンの生活	二十一	丁
詩篇	二十三	丁
伊太利漫遊	三十	丁
活劇時代	三十九	丁
年表	三十九	丁
目次	一	丁

盲 詩 人

別天樓主人著

ミルトン時代に於ける英國形勢の一斑

英國の革命を代表して「文」と「武」とに各一箇の大偉人ありしを見る。其「武」を代表したるは、鐵騎軍の首領オリヴァー・クロムウェル其人にして、容手粗野、鼻は長くして赤く、眼は炯々として灰色を帯び、一見して剛邁果斷の人たるを辨し得べく、「文」を代表したる其人は、容姿端正にして自ら都雅、問はずして德行を重ずる文人詩家たるを知るに足る、誰がジョン・ミルトン即ちこれあり。蓋しクロムウェルの一生は英國革命史の大部分たるが如く、ミルトンの一生も亦た實にその一部

ミルトン時代に於ける英國形勢の一斑

一

晩 年

子弟教育	四十一丁
初婚	四十六丁
散文時代に入る	五十二丁
拉典秘書官	五十八丁
ミルトンの散文	七十五丁
年表	七十九丁
王政回復後のミルトン	八十一丁
「極樂墮落」の歴史	九十二丁
「極樂墮落」の大綱	百 丁
「英國史」極樂回復「サムソン、アゴニステス」	百十九丁
習慣、家内	百二十二丁
容手	百二十四丁

二

を占む。マコーレー曰く、ミルトンは詩人あり、政治家あり、哲學者なり、英國文學の名譽あり、英國自由の勇士あり、明星ありと。想ふに彼れが生涯に於て、固より多少の缺點なきにあらざると雖も、概して論すればマコーレーの言ふ處の如し。抑も十七世紀の英國文學を代表せし者、ミルトンの前後其人に乏しからず。即ちシェクスピアあり、ベン、ジョンソンあり、フレッチャルあり、バットラーあり、ドレイトンあり、テロルあり、ドライデンあり、彬々として盛なりき。然れども彼等の述作は、大抵想像と感情との上に築き立てたる美、其ものを顯現したる者にして、「自然の律法」を除去しては、別に宗教若しくは規律として見るべきものなく、往々流れて以て徳義の範圍を脱出することあるに至る。ミルトンに至りては全く之れに反し、主張せし所の宗教は實際的の宗教にして、建設せんと欲せしは自由の政体あり而して之れを一貫するに、徳義を重するの精神を以てし、一事一物悉く徳義より離

れて之れをなさず、敬肅嚴格、當代稀に見る所。ミルトンか徳操と思想とは、史上の紀念碑として見るに足ると稱せらるゝは洵に溢美にあらざるなり。彼れ洵に斯の如き精神と操行とを以て革命軍の文事を司どれり、革命軍が「武」の外、更らに光彩を文事に放ちしは、斷して偶爾ならざりしを知る。知らず英國の革命とは抑も何ぞ。大女王エリザベス崩してジェムス一世繼ぐ、一世、性、剛愎倨傲にして秕政多く、帝王神權説を堅持して國民を見ること奴隸の如し。次でチャレス一世の位に昇るに及んで、宗教上に於ては、倫孰の監督ウイリヤム、ラウド一輩の辟見を容れ、千方萬計、カルビン派の神學を抑壓し、清教徒の意見を迫害し、之れが爲め清教徒の遁れて米國に赴きし者多く、政治上に於ては、帝王神權の説を固執することジェムスよりも甚だしく、專制暴横、國人益々苦み益々恐む、其西班牙と戦ふや、國會の軍資支出を協賛せざるが爲め、擅に金錢を徵集して之に充て、又た自

ミルトン時代に於ける英國形勢の一斑

ら逮捕状を發して臣民を囚繫するに至る。權利の請願此時に出で、ハ
ンブデンが船税を拂ふを拒みしも此時なり。王争でか國會のかゝる
不順柔を忍ふを得んや、千六百二十八年、遂に解散の命を下だし、思ら
く、未來永劫、誓て召集せずと。ハムハの初め、國會に入り、初め
て解散されしは此國會なり。ミルトン時に尙ほケンブリッヂ大學に
在りき。降りて千六百四十年四月に至り、王、蘇格蘭と戦ひ、復た軍資を
得るに途あきを以ての故に、已むを得ず國會を召集して出處を求め
んとせり。ミルトン時に伊太利漫遊より歸て龍動に寓せり。抑も四
十年の召集は却て王家の不利を來たし、國會の爲めに大權を掌握せ
らるゝこと十三年、稱して長期國會と云ふものこれなり。爾來反對黨
の勢、猛烈當る可らず、ストラフォードは王の虐政を助けしとの故を
以て、國會の斬る所となり、ロイドも亦た同し理由を以て獄に投せら
れ、星院も亦た廢せられ、議員の承諾を得るにあらずんば、國會は決し

て解散せられべきにあらずと云へる議案も、亦た難なく議決され、且
つ全四十一年十一月、ハムハの提出にかゝる、國家防禦の爲め
には、エッセックス伯何時たりとも義勇兵を指揮すべしとの案も、亦
た難く通過しぬ。國會軍は實に勝をこゝに濫せり。王、國會の舉動、斯
の如く傍若無人あるを見て憤懣に堪へず、全四十二年、叛謀の罪あり
と稱して有力なる五人の議員を交附せんとを求めしに、國會之れを
拒んで命を奉せず、王怒り、翌日直に兵を引て議會に臨みしに、五人の
者謀して之れを知り、王の兵未だ到らざるに遁れ去れり。國會は王の
斯の行爲を以て、憲法を蹂躪し、國民を蔑視するの太だしきものとあ
し、公然敵對の意を表し、而して王遂に首府を去て、ヨークに之けり。此
頃ミルトン連りに小冊子を著はして改革派を助け、又た子弟の教育
と自修とに餘念なかりき。爾來王と國會との間に使者を往復せしこ
と數閱月、而も遂に要領を得ず、殺氣益々濛々たり。此時に當りて、貴族

ミルトン時代に於ける英國形勢の一斑

僧侶、地主等の大半は王黨に與みし、職工、商賈、地主、併に小數の貴族は國會に黨し、而して國會黨の多數は清教徒に屬し、清教徒の風として其の頭髮を短く雉り込み居たりしを以て、王黨之を嘲りて圓頂黨と渾名せり。此歲八月二十二日、王、兵を舉げてノッチンガム城に屯し、先づ檄を飛ばして國會の不法を責め、依て以て人心を動搖せんとせり。こゝに於て、國會も亦た激を飛ばして王黨の罪を責め、エッセックス伯を推して總督とし、兵を募て王軍を防かしむ、其の十月二十七日、エッチ丘に會戦して勝敗決せざりしも、王の軍次第に龍動に迫りしを以て龍動市中人心汹々たり。再來兩軍相戦ふこと六年、互に勝敗ありしが、千六百四十五年以後に至りては、王の軍連戦して連敗せり。始め國會軍の首領は伯爵エッセックスなりしが、玄ぼらくにしてクロムウェルの鐵騎、世人の知る所となり、國會軍の勢頓に振へり。抑もクロムウェルは、熱心篤實ある清教徒にして、全隊又た悉く熱心ある信徒より

成り、其の戦に臨むや、口に詩篇を誦して進む、死を見る歸するか如く、兩軍次第に相迫る處、鐵蹄殆んど地に着かず、縱横馳突、向ふ處風靡せざるはあし。此れより先き、清教徒分れて二となり、一はプレスビテリアンと稱し、政治上の意見は、單に王權を制するに止まるが、他の一派即ちインデペンデントと稱する者に至りては、王位を全廢するを以て大目的とせり、クロムウェルは實に此派の首領にして、ミルトンも亦た殆んど此派に屬せり。千六百四十五年、即ちミルトンが「出版自由論」を著はせし年、王の軍大にナイスビーに敗れ、王走りて蘇格蘭に入る、蘇人王を庇せず囚へて以て國會に交附し、而して國會は之れをハムプトンの法院に幽閉せり。此時に當りてウエルスの山人、王朝回復を名として起ち、南方の各州應する多く、蘇格蘭にも亦た反徒あり、起ちて國境を犯し、風魚の警連りに至る。こゝに於てクロムウェル等路を分ちて出征々服せしも、内憂の大ある者尙は一あり、即ちプレス

ミルトン時代に於ける英國の形勢一斑

ビテリアンに屬する議員にして、王と協議の末、王と國會とは各其の言ふ所を容れ、而して國會は將に王を許さんとせり、これインデペンデント黨の大本領と正反對あるもの、故を以て千六百四十八年十二月、クロムウエル突然兵力を以て、プレスビテリアン派に屬する議員一百餘名を議院より追ひ出し、翌年一月二十日、ウエストミンスターに高等法院を開きて王を審問し、其の二十七日、叛逆、公敵の名を以て死刑を宣告し、其の三十日王を引て斬頭臺に上らしめぬ。ミルトンが拉典秘書官の職に就きしは此年なり。國會既に王を弑して、民主政体を建て、共和と稱するもの、十一年、分ちて二期となす。第一期は王の死後、クロムウエルの守護職となれる迄にして、第二期をクロムウエルの治世とす。稱して、第一期第二期と云ひ、或は稱して共和政治と云ふも、實權は悉くクロムウエルの握る所にして、或は兵力を以て國會を解散し、或は全國を分ちて十一區とし、每區少將一人を置き、無限の權

力を以て民人を御せしめしが如き、クロムウエルの行爲、殆んど專制國王と異らざるものあり。又た彼れが外交政略たる、頗る剛毅嚴明にして、其の性質、其の地學上の位置、其の商業上の繁盛等、遠くスコチア、ト家の前二王に過ぎて殆んどエリザベス大女王の時に比倫せん。どし、各國皆な震懼せり。然れども其の晩年に至るに及んで、諸黨員多く怨望し、而して彼れ又た憂慮の極、身体疲労して瘡疾に死す、時に千六百五十八年、年六十。ミルトンが第二の妻も亦た此年に死せり。クロムウエルの死後、王黨志を得て國會黨四分五裂し、而してミルトンが運命も亦た益々窮迫せしが、「極樂墮落」の大史詩は、實に此際に成れり。事は本傳に詳かあり。

ミルトン時代に於ける英國の形勢一斑

年少時代

年表

千六百〇八年十二月九日龍動に
生る。

同十年王と國會との間に憲法

上の争論あり。

同十六年シエクスピーヤ死す。

同十七年ベークン死す。

同十九年清教徒メーフラワー

號にて新英洲に赴く。

千六百廿四年ケンブリヂ大學に入る

千六百卅二年大學を去る、爾五年間

ホルトンに住す。

外邦

千六百十六年セルバンテス死
す。小野お通死す。澳太利發見せ
らる。

同十七年三十年戦争始まる。

同十九年藤原惺窩死す。

同二十年モリエール生る。

同三十一年吳梅村生る

同三十六年ハンプデン船税を拒む。

千六百三十七年母死す。

千六百三十八年伊太利漫遊の途に上る。

千六百三十九年歸國す。

同三十八年ルイ十四世生る

家系、家庭

年 少 時 代

ミルトンの家系は、諸説區々にして未だ詳かならずと雖も、世々テムズ河の近傍に住して、土地の名族たりと云ふは眞に近かるべきか。傳ふる所によれば、ヨーク、ランカスター等の時代には、廣き領地を有し、領内に堡塞を築きて住居せしこともありと云ふ。盲詩聖の祖父は名をデヨンと云び、オキスフォールドより、殆んど五哩ばかりを隔てたるシヨットパーと呼ぶ林中にてステートンと云へる所に住し、地の郷士にして、林務屬官の職を奉じ、又た極めて熱心なる羅馬法皇の信奉家なりき。林務屬官に唯た一子あり、名は父と同じくデヨンと呼べりしが、父の羅馬教を尊崇するにも係はらず、擅に新教に歸依したりこの故を以て、義絶せられ、已むなく龍動市に入り、筆耕を以て業とし、始めはただ困難に生活せしが、次第に資産を作り、千六百年サラ、ジェフレードと云へる婦人と婚し、全八年十二月九日の朝六時半の頃、我が

家系、家庭

大詩人を龍動に生めり、實にシロムウエルガ生後七年なり。デヨンに五兒あり、長兒は生れて忽ち夭折し、次兒は女子にして名をアーンと云ひ、後フヒリップに嫁して二男を生みぬ、四兒も亦た全しく女子にして、名をサラード云ひ、末兒は名をクリストファーと云ひ、後、法を修めて王黨に屬せり。而して第三兒は實に大詩人ミルトンにして、祖父及び父の例に従ひ名づくるにデヨンを以てせり。抑もデヨンが初て呱呱の聲を擧げたりしは、ブレット町なる鷺の目印ある家にして、彼れ實に純然たる龍動人あり。されば、龍動人が今に至るまで、龍動、古より文人詩客に富む、チヨサー、スペンサー、カウレー、ベンデヨンソン、ポープ、グレイ等は皆な龍動人にして、ミルトンも亦た我等と共に龍動人なりと誇稱するは以なきにあらざるなり。蓋し當時の龍動は、其の繁華今日の五分一にだも達せずして、就中ブレット町は繁華の市街にはあらずりと云へば、ミルトンの生れたる家の如きも、亦た必ず

や見るに足るべき程のものにあらざりしからん。抑も遺傳と家庭の教育とは、共に大材を養成成就すべき源泉にして、古より大人と稱せられ、英傑と崇はれ、其の量の博きこと、天の如く、其の徳の深きこと、海の如く、其の智、其の勇、當代に冠絶せし者、若しくは、曠世の大著を完成せし者は、大抵方正篤信ある家庭と遺傳とより流出したる者に、して、悪しき遺傳若しくは、悪しき家庭より生れ出てたる者、蓋し稀あり。傳紀家の言ふ所に、よれば、ミルトンの父は品行方正にして、文才に富み、且つ音楽に精しく、自ら案出せし新譜も少からずと云ひ、而して母も亦た婦徳高かりし人なりと傳ふ。想ふに營々たる小商賈のみ軒を並べし、ブレット町の中に、只た一の商人的にして、而も又た學者的、宗教的にして、而も又た詩歌的なる一家あり、其の家人の容儀は整ふて、素れず、其の信仰は清ふして、高く、或時は讀み、或時は書き、又た或時は洋々たる樂に和して、讚美歌を歌ひ、和氣融々として、一家の中常に春の

家系、家庭

如く、萬緑叢中紅一點の觀ありしは、問はずしてこれミルトンの家あり
 りしを知るべかりしをかくの如き家庭よりしてて、嚴肅なることミ
 ルトンの如き大革新の希望に
 文學振興の美觀を加ふるに富むことミルトンの如き、カールのピンの眞摯に
 ペンセルの雄麗を添へしことミルトンの如き者を生せしは、洵に偶
 爾にあらざるあり。

少年時代

學校

父母が心をミルトンの教育に用ひたりしや極めて厚く、家はセント、
 ポール學校に近かりければ、夙に入學せしめ、又た家に私雇教師をも
 延きて學はしめぬ。此の私雇教師と云ふは、清教徒の一人にして、其の
 頭髪を清教徒風に短く刈り込み、虚飾なく、贅辨なく、意氣ただ激越に

少年時代

して、志操亦た確乎たりきと云ふ。セント、ポールの校長は、オックフォ
 ルド大學出身の人にして、名をアレキサンダーと呼び、教育家と
 して當時に聞へ、其の子デルも、亦た文學と音律とに精通しミルトン
 が親友の一として、ミルトンを裨益せしこと少からざりきと云ふ。又
 た校にチャルス、デオダテと云ふ者ありて、ミルトンと友とし善か
 りき。デオダテの父は伊太利の人ありしが、羅馬教より改宗して新
 教となりしを以ての故に、本國に住すること克はず、逐はれて龍動に
 來り、醫を業として生活を營み居たり。父、既に伊太利人なり、兒は就令
 英國に生長したりと雖も、父の感化を受けて母國の言語文字に嫻へ
 りしは論なければ、交遊の際、知らず識らずの裡にミルトンをして伊
 太利文學を愛好するに至らしめぬ。
 父母、夙夜に心を盡くしてミルトンを教育し、敢て或は怠る所なかり
 しは勿論なりと雖も、ミルトン自身の勉學も亦た決して非常人の企

學校

て及ぶ所にあらざりき。彼れが視力は太だ弱く、且つ頭痛持ちなりし。も係はらず、其の十二歳以上は、夜半過刻にあらずんば、決して寢に就かず。之れが爲め父は屢々下婢に命じて、彼れに侍せしめたりきと云ふ。以あるかな、彼れがカンブリッチ大學に入りし頃は、略々既に希臘、拉丁、ヒブリユ、佛蘭西、伊太利等の諸國語に通せしと云ふことや。

千六百二十五年二月十二日、ミルトン歳十七、セント、ポール校を去り、給費生としてカンブリッチ大學に移り、クリスト饗に入りぬ。ブルツの說によれば、ミルトン千六百〇八年に生れ、同二十五年にカンブリッチ大學に赴きたり、さすれば彼れが龍動に在りしは十六年なり、此の十六年の間、恐くはシエカスピヤを見たることもあらんかど。

さてセント、ポールの校長は、オキスフォールド大學の出身にして、ミルトンは實にそが監理せし學校に學びしなれば、ケンブリッチに赴かずして、寧ろオキスフォールドに赴かんは、行きかゝり上然るべく見ふ

るなれど、却てカンブリッチ大學に赴きしは、父が志に従ひしなりきと聞ゆ。蓋しミルトン時代に於けるカンブリッチ大學の組織は、今ま見る所のものと大に其面目を異にし、其の學科は七科に分れて、哲學、神學、算術、幾何、天文、音樂は各別れて一科を爲し、而して文法、論理、修辭等は集り以て亦た一科を成せり。ミルトンが主として學習せしは後者にありと見ゆ、此時はニュトン未だ生れざるの時にして、數學の程度太だ高からず、其高等數學の講席を設けしは、ミルトンが大學を去てより三十年の後にありき。抑もカンブリッチは英國二大學の一にして英國文學のカンブリッチ大學に負ふ所あるや大あり。ミルトンの前にはスペンサーありて、茲處より出で、ミルトンの後にはドライデン、グレイ、ウオルズウオルス、コレリツチ、バイロン等の諸家も亦た皆あ茲處に於て教育せられ、去年死去せしテニソンの如きも、亦た實にカンブリッチ大學出身の一人なりとす。ミルトンのカンブリッチ

大學に入りしは、固より偶然のみと云ふも、又た以てカンブリッヂ大學を榮するに足るものあり。ミルトン、元來容儀に端整にして、學藝も亦た秀逸かりしを以ての故に、同輩皆を渾名して「ハット賢の貴女」と呼び、學生の代表者を要せん折には、大抵ミルトンを擧げたりと云ふ。然りと雖も彼れは決して柔弱温順ある學生にあらず、其の不羈自由を愛するは、後年革命軍に投して文事上の機密を司とりし事にても知らるべき程なれば、大學の窮屈なる規則に忍ぶは頗る堪へ難きことにして、教授と争ひしは二三回に止まらず、而して其の罰せられしも亦た二三回に止まらざりしと云ふ。されど千六百二十九年の三月得業士に擧げられ、全三十二年七月には學士に進められぬ、時に年二十四なり。

獅兒の母胎を出て、地に墜るや、直に百獸を威服するの氣ありと云ふ、大詩人、大文人となるべき人にして、豈に夙に頭角の斬然たるを示

さいらんや。ミルトンが大學に在りし際、作りし所の詩篇にして、其の今に残るもの十有四、就中千六百二十六年に成りし「幼兒の死」全二十年に成りし「基督の誕辰」全三十年に成りし「嚴肅なる音樂」「情の歌」及び「シエックスピアの碑」全三十一年に成りし「二十三歳述懐」及び「ナイテングール」等の諸篇を以て、最も人口に膾炙する所とす。

ホルトンの生活

千六百三十二年、ミルトンのカンブリッヂ大學を去るや、直にウインドンブルに程近きホルトンに往けり。是れより先き父は龍動を去りてホルトンに移り住み居たればなり。ホルトンは龍動を距ること十七哩ばかりの小村にして、地閑靜にして、風光も亦た佳なりき。初めミルトンは父及び友人の薦めに従ひ、牧師とならんどの志望を懐きたり

い。が。眼。光。次。第。に。高。く。謙。見。次。第。に。長。し。て。教。會。の。腐。敗。を。目。睹。す。る。に。及。び。て。は。首。を。垂。れ。て。腐。敗。し。た。る。教。會。に。入。り。心。に。も。あ。き。宣。誓。を。な。し。て。そ。の。奴。隷。に。甘。せ。ん。は。嚴。格。な。る。こ。と。ミ。ルト。ン。の。如。く。學。識。あ。る。こ。と。ミ。ルト。ン。の。如。き。者。の。決。し。て。爲。す。を。潔。し。と。せ。ざ。る。所。即。ち。テ。ィ。ン。の。評。せ。る。べ。し。と。決。し。ぬ。又。た。彼。れ。は。法。律。を。以。て。身。を。立。て。ん。と。の。志。望。あ。き。に。い。も。あ。ら。ざ。り。し。が。之。れ。も。亦。た。彼。れ。が。志。を。繫。く。に。足。ら。ず。こ。い。に。於。て。大。學。を。去。り。て。家。に。歸。る。や。土。産。と。し。て。携。へ。來。り。し。は。深。遠。な。る。學。識。と。高。尙。な。る。思。想。と。の。み。俗。人。に。喜。は。れ。ん。土。産。と。て。は。一。物。も。な。し。當。時。家。には。父。母。及。び。弟。ッ。リ。ス。ト。フ。ァ。ー。姉。ァ。ー。ン。の。二。同。胞。あ。り。し。と。雖。も。幸。にも。ミ。ルト。ン。を。し。て。自。ら。勞。し。て。日。毎。の。パン。を。得。す。る。に。至。ら。ざ。り。け。れ。ば。心。靜。か。に。廣。漠。な。る。希。臘。拉。典。の。文。野。を。涉。獵。し。て。ヒ。ブ。リ。エ。シ。リ。ア。等。の。古。文。學。に。及。び。英。の。古。文。學。に。枕。籍。し。て。佛。蘭。西。西。班。牙。伊。太。利。等。の

文。想。を。も。細。嚼。し。傍。ら。音。樂。數。學。神。學。等。を。研。鑽。し。其。の。含。蓄。涵。養。す。る。所。益。々。深。し。蓋。し。彼。れ。が。志。望。は。美。衣。に。あ。ら。ず。美。食。に。あ。ら。ず。德。を。修。め。學。を。修。め。想。を。養。ふ。に。あ。り。け。れ。ば。靜。け。さ。ホ。ル。ト。ン。の。生。活。は。彼。れ。が。爲。に。無。上。の。好。箇。處。と。云。ふ。べ。き。な。り。此。時。に。當。り。て。朝。廷。に。は。チャ。レ。ス。一。世。位。に。在。り。て。暴。横。專。權。秕。政。の。み。打。ち。續。き。國。富。進。ま。ず。國。光。耀。か。ず。人。心。太。た。動。搖。し。居。た。り。又。た。當。時。龍。動。の。人。口。は。三。十。萬。内。外。に。過。さ。ざ。り。し。と。云。ふ。

詩 篇

ミ。ルト。ン。が。ホ。ル。ト。ン。の。生。活。中。作。り。成。し。た。る。名。篇。五。即。ち。千。六。百。三。十。三。年。に。成。れ。る。も。の。に。は。「ア。レ。グ。ロ。ー」。「イ。ル。ベ。ン。セ。ロ。ッ。」の。二。篇。あ。り。「ア。ー。カ。デ。ス」も。亦。た。蓋。し。全。年。の。作。な。ら。ん。と。云。ふ。全。三。十。四。年。に。成。れ

るものには「コマス」あり、全三十七年即ち伊太利漫遊の前年に成れるものには「ライシダス」あり。

年 少 時 代

「イル、ベンセロッ」「ラレグロ」
と云へる題號は、共に伊太利語にして、前者は幽鬱を意味し、後者は快活を意味す。即ち前詩は幽鬱なる人の、二十四時間内に於ける理想を現はしたる者にして、後詩は快活なる人の、全しく二十四時間内に於ける理想を現はしたる者とす。而して幽鬱も、快活も、共に捨つべきものにあらずと結へり。想ふに「ミルトン」が讀みし所のもの、見し所のもの、若しくは聞きし所のものにして、一たび脳裡に入りて、後、筆端に上り來るや、面目爲めに一新し、其の入る時は腐陳なりしものも、其の出するに及んでは化して斬新となり、其の入る時は卑野なりしものも、其の出するに及んでは化して純清とある。されば評する者往々にして「ラレグロ」「イル、ベンセロッ」に寫せる二箇の青年は、疑もなく「ミルトン」自身にして、叙せし所の景

年 少 時 代

物は疑もあらず「ホルト」近傍の景物ありと云ふは、蓋し適評なるべし。『アーカデス』は友人ロウイスの需めにより、デルピ―伯未亡人の爲めに作りし假面劇にして、未亡人の徳を頌せしものに係る、ロウイスは「ミルトン」の知人にして、當代有名の音楽者あり。

第一期時代中の最長篇を「コマス」とす、即ち題して「ラッドロー城にて演せし假面劇コマス」と云ふものこれあり。案するに、ラッドロー城は、もとウエルス公の居城にして、嘗て小朝廷の如きものゝ置かれしことありしが、當時はデルピ―未亡人の女婚にして、伯爵ブリッヂウオターと云へる人の居城となり、其の華麗は遠く昔日に及はずと雖も、自からある莊嚴は依然たりと云ふ。劇の大要は「コマス」なる魔神、姿を牧羊兒に變し、路に迷ひたる少女を誘惑して、非欲を遂げんとせしに、少女節を守りて屈せず、かゝる折りしも、少女が二人の弟、精靈の導きに依て姉の居所を知り、馳せ來りて魔神を追ひ、女神の助けを得て、

全く救ひ出たすに了る。其の最終の句に曰く、我れに従はんと欲する人々よ、徳を愛せ、徳のみは全く自由なり。下界より天上に昇るを教へんものは徳のみなり、徳若し力弱くんば、上帝は降りて徳と居らんと。ミルトンが徳を尊び、自由を尊び、後、自由を護らんが爲めに、文字を以て革命文壇の雄將となりしこと、既に此篇に於て其の傾向を知るに足る。評する者或は云ふ、此篇の粉本は之れをシェクスピアの「テンペスト」及びビュモント、フレッチャーの「忠實ある牧羊女」に取れり。兎に角「コマス」は其の想と詞との豊富にして莊嚴なる、洵に人目を眩するばかりにして、マコーレーが評して以て、これ確に各國の國語中に存在せる、最も高尚なるものの一ありと云ひしは、蓋し過賞にあらざるべし。後、三年を経て、龍動に於て出版せしが、著者の名をば附せざりき。

千六百三十七年八月、同窓の友人キングある者、伊太利に赴かんとて

チエス灣より出帆せしに、不幸にして船アイリッシ海に破れ、キング遂に激浪の中に死しぬ。「ライシダス」は之れを吊ふたるものにして蕭條悲愴なり、而して篇中暗に僧侶の腐敗を諷刺したる箇所も見ゆ。ミルトン嘗て僧とあらんとし、其の腐敗に堪へずして已めり、「ライシダス」の詞中に、僧侶を諷刺するの句あるを見るは偶爾にあらずと云ふべきあり。

蓋し法律も、政治も、醫學も、數學も悉くミルトンの職業に適する者にあらず、若し彼の職業に適するものありとせば、唯た夫れ文學にして、寧ろ其の半座たる詩のみなり、彼れは實に之れを以て世に立ち、之れを以て名をなし、之れを以て家を成し、之れを以て樂み、之を以て死せんと決せり。要するに、詩は洵にミルトンの預言的職業にして、又た洵に天與的職業也。されば彼れが學ひ得たる深奥の學藝も、歴史も、神學も、論理も、哲學も、數學も、政論も、悉く詩の一點に向て朝宗し來るも

の。に。し。て。美。と。云。ひ。壯。と。云。ひ。雄。辨。と。云。ひ。正。義。と。云。ひ。善。良。と。云。ひ。道。徳。
 と。云。ふ。觀。念。も。亦。た。皆。來。り。て。彼。れ。が。詩。と。化。せ。さ。る。は。な。し。蓋。し。聞。く。
 詩。人。は。成。る。に。あ。ら。ず。生。る。に。な。り。若。し。夫。れ。一。種。天。賜。の。詩。人。的。性。質。を。
 有。せ。る。者。に。あ。ら。ず。ん。ば。決。し。て。詩。人。と。あ。る。こ。と。克。は。さ。る。な。り。と。洵。に。
 確。的。な。り。是。に。於。て。か。學。術。に。粗。な。り。と。て。智。識。に。短。な。り。と。て。詩。人。と。し。
 て。成。功。せ。し。者。往。々。に。し。て。あ。り。而。し。て。ミ。ル。ト。ン。に。至。り。て。は。天。賜。的。詩。
 人。の。性。格。を。具。有。せ。る。が。上。に。古。今。の。學。藝。及。び。四。方。の。言。語。等。苟。も。當。代。
 に。於。て。學。び。能。ふ。丈。け。は。之。れ。を。學。び。得。て。殘。す。あ。し。彼。れ。が。詩。人。と。し。て。
 成。功。せ。し。は。偶。然。に。あ。ら。す。と。云。ふ。べ。し。然。り。と。雖。も。亭。々。千。仞。長。翠。常。に。
 滴。れ。ん。と。し。蟠。根。地。中。に。縱。橫。し。て。大。風。大。雨。之。れ。を。如。何。と。も。す。る。能。は。
 さ。る。の。大。松。は。固。よ。り。朝。夕。に。し。て。成。る。の。に。あ。ら。ず。さ。れ。ば。ミ。ル。ト。ン。
 の。年。少。時。代。は。謂。は。ば。準。備。の。時。代。に。し。て。製。作。の。時。代。に。あ。ら。ず。就。令。製。
 作。の。時。代。に。あ。ら。ず。と。云。ふ。と。雖。も。「ラ。レ。グ。ロ。ー」以。下。の。五。篇。は。單。に「極。樂

墮。落。の。著。者。に。依。て。作。ら。れ。た。か。と。云。ふ。の。故。を。以。て。に。あ。ら。ず。し。て。他。人。
 の。名。を。署。し。て。之。れ。を。英。文。學。の。中。に。列。す。る。も。亦。た。頗。る。傑。作。と。し。て。數。
 ふ。る。に。足。る。と。稱。せ。ら。る。
 想。ふ。に。詩。人。の。題。目。と。す。る。所。の。も。の。大。抵。二。一。は。即。ち。花。鳥。風。月。山。川。雷。
 霆。等。を。捉。へ。來。り。て。之。れ。を。寫。さ。ん。と。擬。す。る。も。の。に。し。て。他。は。人。類。間。の。
 事。實。及。び。心。理。の。現。象。等。を。寫。し。出。さ。ん。と。擬。す。る。も。の。即。ち。一。は「自然」を。
 目。的。と。し。他。は「人」を。目。的。と。す。古。來。よ。り。東。洋。の。詩。人。は。大。抵。前。者。に。傾。き。
 自然。を。歌。ふ。こ。と。多。く。人。を。歌。ふ。こ。と。多。か。ら。ず。西。洋。の。詩。人。は。或。る。者。は。
 「自然」に。傾。き。或。者。は「人」に。傾。き。又。た。或。者。は。自然。に。も。傾。か。ず。人。に。も。傾。か。
 さ。る。も。の。あ。り。蓋。し。ミ。ル。ト。ン。は。多。く「人」に。傾。き。少。し。く「自然」に。傾。き。し。者。
 なる。へ。し。見。る。べ。し。彼。れ。が。詩。の。人。間。を。以。て。中。心。と。し。而。し。て。自然。の。景。
 物。を。以。て。其。の。周。圍。を。裝。飾。せ。ん。と。務。め。し。を。即。ち。其。年。少。時。代。の。作。な。る。
 「ラ。レ。グ。ロ。ー」「イ。ル。ベ。ン。セ。ロ。ッ」等。を。始。め。と。し。て。絶。筆。た。る「サ。ム。ッ」

伊太利漫遊

アゴニコステスに。至るまで。皆。此の傾向の。通流せるを。認むべし。

伊太利漫遊

年 少 時 代
セントポール校に在りし頃より、伊太利語は、業既に學習して怠らざりし所、爾來次第に熟し來り、ダンテ、ペトラーク、ダツツリ、アリオスト一等の書を細嚼玩味するを得るに及んでは、耳をしてタスカン調に酔はしめ、目をして山翠に、水清き半島の古雄邦に飽かしめんとの心、愈々動きて片時も休すること克はざりき。千六百三十七年惡疫ホルトニに流行し、母之れが爲めに長逝して歸る可らざりければ、ミルトン悲痛禁す可らず、而して母の死は益々伊太利漫遊の志を堅ふしぬ。蓋しミルトンのホルトニに歸りてより、年所を経ると既に五年、時として書物を買はんが爲めに、又た時として演劇を見んが爲めに、又た

年 少 時 代

時として友人を訪はん爲めに、屢龍動に遊びしが、未だ數百里の長程に上りしとわらず。此に至りて千六百三十八年、久しく夢想し居たる伊太利漫遊の途に上るとはなりぬ。ミルトンの前に在ても、後に在ても、伊太利は洵に歐羅巴各國の文人詩客が第二の故郷にして、苟も文人詩客にして伊太利に遊ばざる者寥寥。彼が南遊に熱せしは以なしとせざる也。若し夫れ假りにミルトンの生涯を分ちて三期とし、プレット町に呱呱の聲を擧げてより、伊太利漫遊を終へて歸朝せし日までを以て第一期(年少時代)とせば、第一期はホルトンの戸と共に閉ざされたる也。

千六百三十八年四月、サー、ヘンリー、ウオットンの書狀を携へ、海狹を渡りて佛國に入りぬ。ウオットンは曾てベニスに公使たりし人にして、當時イートン大學の教頭なりき。歳の五月、彼れの巴理に入るや、直に英國公使スーダモアを訪ふて懇待せられ、公爵の紹介に依て、瑞

典女王クリスチアナの使節として、巴理の朝廷に駐在せし、傾學ユゴ
 ー、グロテアスに見へぬ。偉人に接するも、亦た心氣を養ふの一なりと
 云ふるれば、巴理に入りて以來、其の得し所鮮少にあらざりしあるべ
 し。然れども、ミルトンの心と願とは、ミルトンをして伊太利に急がし
 め、公爵より數通の紹介状を得て、ナイスに赴き、ナイスより船を僦ふ
 て、ゼノアに赴き、ゼノアよりレホンに赴き、レホンよりピサに赴き、ピ
 サよりフロレンスに赴き、茲所に留まること六十日。蓋しフロレンス
 は、雷に風物の美愛すべくして、氣候の和適あるに止まらず、學者、詩人
 等の彼れを歡待せし者少からざりしかば、二月の長滞在をゑすに至
 りし、あらん。即ちジャコモ、ガデーの如き、アントニオ、フランシニの
 如き、カルロー、ダデーの如き、ベチデー、ボンマデーの如き、カルテリ
 ノーの如き、フレスコバルデーの如き、クレメンテリーの如き著名の
 人々は、皆新得の熟友にして、アントニオは彼れの爲に拉典語の送

歌を作り、カルローも亦た彼れの爲めに拉典語の頌詞を作りぬ。歡未
 た全く竭きしには、あらざるも、前途に訪ふべきもの極めて多し、即ち
 去りて羅馬に赴けり。
 アルペンの山千古翠にして、チベルの河長へに清し、羅馬は雷たに風
 光の美、賞すべきのみには、あらず、美ある其の山、美なる其の水、聲無ふ
 して、幾多英勇、豪傑、佳人、高僧、騷客、文士等の歴史を語り、流石は希臘文
 明以來の古帝邦、星遷り物換りぬと雖も、騷客文士が心を潜め、目を留
 めて展観するの繪畫、彫刻尙は多く、且つや頽廢倚傾したる古殿堂は、
 空しく古への面影を留めて、行客の膺を絞らしむ。况んや十七世紀の
 頃、に在りては、尙は歐洲の一文野たるを失はずして、學人文士少から
 ざりしかば、ミルトン、彼等と應酬して益する所少からざりき。就中、バ
 チカン圖書館の管理長に、ラカス、ホルステニアスと云ふ者あり、彼れ
 嘗てオキスフォルド大學に在りしこと三年、ミルトンの羅馬に來る

に及んで思ひらく、これ英人に酬ゆべきの時なりと、即ち館中の秘書を出してミルトンに讀ましめぬ。ミルトンが希有なる希臘拉典の古文書を見るを得たるは、洵にホルステニアスの賜ものなり。ホルステニアス又たミルトンをカイテナル、バベリコーに紹介し、而してバベリコーは當代第一の唱歌師レオノラ、パロコーをしてミルトンの爲めに歌はしめぬ。ミルトン聽き了りて感に堪へず、拉典語を以て三首の歌を作り、之れを彼の美に贈れり。かくの如くにして、羅馬に留まりしこと六十日、此歳十月の末つ方、ネーブルスに入りぬ。

ミルトンのチーブルスに赴かんとするや、途にして僧某と道伴とあり、僧の紹介に依て、ネーブルスの貴族ピルラ公デオバニー、パテスマー、マンソーと相見るを得たり。公爵時に年七十八、頭白く、体疲れたりと云ふと雖も、元氣未だ衰へず、二世紀に跨りて南方伊太利の文柄を握り、前世紀に在りてはタツソーと友として善く、當代に在りてはマ

リニーと親交あり、而して今亦た、或はミルトンを延て家に宿せしめ、或は駕を柱けて彼れを旅亭に訪ひ、歡待らざるなし。蓋し老公爵、性、洒落淡泊にして虚飾なく、文學及び社交の事に至りては、胸襟を開放して談論風生せしも、談、宗教の事に及へば、多くは遠慮勝にして所懐を盡さざりきと云ふ、言の漏れて法王の怒を招き、或ハ破門の罪に問はれんを恐れてありしあるへし。まはらくありてミルトンのチーブルスを去らんとするや、「マンサス」と題せる拉典詩を作りて之れを老公爵に贈りぬ、以てミルトンと老公爵との交を察すへきなり。

半島に優遊して、其の古文明を察し、併せて以て當代の風尚に及び、其の好山好水を見、其の古寺廢墟を訪ひ、連りに懐古の情を擅にし、又た其の學者、文士に接して、或は宗教上の意見を闘はし、或は詩歌の應酬をなすこと半歳、尙ほ進みてシッリーを見、更らに進みて希臘をも見んとせり。此時に當りて本國の形勢を願れば、國王と國會との軋轢日

に盛にして、國事益非なり。ミルトン報を得て、心私かに思らく、同胞皆
 な力を竭くして、國事に熱中し、自由の爲めに寢食をも忘れんとす
 るに、我れ豈に獨り外邦に悠々たるべけんや。即ち希臘漫遊の志を繙
 へし、踵を旋らして羅馬に歸り、戰尙は起らずとの確報に接し、姓名を
 變し、旅装を緩べて此處に留まりしこと復た二ヶ月、再びフロレンス
 に出でて、諸友に歡待せられ、前遊に見ることを得ざりしが、ガリレオを
 訪へり。是れより先きガリレオは地動説を唱へしを以ての故に、宗教
 裁判の前に引き出たされ、新説を擲たざるの罪として鉄窓の下に投
 せられ、カソリックの信者にあらずんば、何人にも面することを許さ
 れざりき。既にしてミルトンの再び来るや、ガリレオ、正に獄より出た
 されて家に歸るべく許されし時なれば、幸にして斯の科學の大家を
 見るを得たり。彼れ老ひて且つ盲せりと雖も、一見して剛志篤學の人
 たるを知り得べかりしと云ふ。後ミルトンの「極樂墮落」を草するや、篇

中ガリレオの名を記するを見れば、一面の會、如何に深く感ずる所あ
 りしかを見るべきあり。かくて後アペナイン嶺を越へ、ポログナ、フェ
 ラ、等を経て、ベニスに來り、留まること一ヶ月、便船に托して旅中集
 め得たる珍書を本國に送り、身はベロナ、ミラン等を経、アルプス山を
 跋りて佛蘭西に入り、レーマン湖に沿ふてセネバに出で、此處にて神
 學者にてミルトンと神學上同主義を懐けるデオパニー、デオダテ
 なる者の家に宿せり。デオパニーは即ちセントポール校以來に於け
 るミルトンの親友チャレス、デオダテの叔父なり。ミルトン此家に
 宿し、始めて漫遊中に、チャレス、デオダテの死去せしを聞き、大に愕
 き悲痛已まざり。イピタピヤム、ダモニスと題せる拉典詩を作りて之れ
 を哭しぬ。ミルトンの未だ伊太利に遊ばざるや、友人キングの死に逢
 ひ、「ライシダス」なる哭歌を歌ひぬ、まかれどもかれに歌ひし悲みは、寧
 ろクリスチャン分科大學の悲みにして、キングとミルトンとの交際

も、亦たテオダテードミルトンとの厚きに若かさりしかば、「ライシダ
ス」に歌ひし悲みは寧ろ「ダモニス」に歌ひし悲みの、箇人的にし且つ深
きに及ばずと云ふ。既にして茲地より前路を取りて國に歸れり、時に
千六百二十九年八月。斯の遊時を費せしこと一箇年と三箇月。支那の
詩人、嘗て歌て曰く英雄面目詩人膽、一出長城氣象開と、ミルトン島國
より出るゝ大陸を觀し來る、其の得る所、豈に嘗に伊太利漫遊中の小
歌のみならんや。

活劇時代

年表

千六百四十年「英國宗教改革論」を著はす。
此年コヒー初めて英國に入る。
千六百四十二年「セミクタマス辨サ」以下五冊子を著はす。
千六百四十三年マリールと婚す。
千六百四十四年父死す。此年「出版自由論」を著はす。
千六百四十九年拉典秘書官となる。

外邦

千六百四十二年松尾芭蕉生る。
全四十三年北米新英州の植民地合同成る。
全四十四年滿州人支那を征服して清朝を建つ。
全四十八年三十年戦争了りてウエストフアリア條約成る。

此年チャレス一世殺さる。

千六百五十年「英民の防禦」を著す。

千六百五十二年明を失す。妻死す。

全三年クロムウェル護國官とある。

千六百五十六年再婚す

千六百五十八年妻死す。

此年クロムウェル死す。

全五十年デカルト死す。

全五十一年フェチロン生る。

全五十八年近松門左生る。パン
トロンプ英國海狹を泳ぎ越す。

活 劇 時 代

子弟教育

ミルトンの伊太利漫遊より歸りしや、國事日に非あるの概ありしは論なきも、家の内には差したる變化ありしを見ず。父は尙ほ健にして、弟ッリストファアは妻を娶りたれども、尙ほ法を學ひつゝありて、未だ裁判所に出るに至らず、而して又た友人を見れば、ヂルは父に代りてセント、ポール校の校長となり、音樂師ロウイスは音樂の教師として名聲益々高かりき。只た悲むべきは、ヘンリー、ウオットン既に地下に入りて復た見るへからざりしことこれのみ。

伊太利より歸りし初め、龍動市セントブライド寺領内なる一裁縫師の一室を借りて寓せしが、狹隘にして不便少からざるを以て、幾干もなく家をエルダスゲート町に賃して移れり。此家は庭園もあり部屋敷も多く、且つ市街の塵俗より離れて頗る幽靜なる處ありしかば、靜かに考へ靜かに讀まん底の人物には極めて適當ある住居なりき。蓋

し獨居にして勉學の志厚き人には、書物の缺乏程不自由を感ずるものなし。千六百四十年の頃には、龍動の市中、尙ほ一箇の圖書館さへ設立されざりしかば、學に篤くして家に藏書少き者は、書を讀むに不便多かりき。ミルトンが從來の藏書たる、固より多しと云ふにあらざりしも、新たに伊太利に於て得たる所のものを加ふれば、稍々望を満たすに足り、且つ友人より借覽し、又た常に購求するを怠らざりしかば、書籍に於ては、太だしき不自由を感ずに至らざりき。これより先き、ミルトンの姉アーン、エドワードと婚して二子を擧げしが、ヒリップの死するに及んで他に再嫁せり。ミルトン、裁縫師の家に寓せし頃より次子を招て教へ、且つ共に住せしめしが、翌年エルダスゲート町に移りてより、長子も亦た來りてミルトンの家に住し、共に與に彼れが教育を受くる事となりぬ。後「ミルトン傳」を書きしは即ち此兒にして名をエドワードと呼べり。既にして千六百四十三年の頃に至

りては、他の子弟にも教授すべく始めたり。思らく、一人を教育する、二人を教育する、と、教育するに於て異なる處ある、二人を教育する、と、六人、人を教育する、と、教育するに於て異なる處ある、昔より後進を導て、徳の何物たり、智の何物たるを知らしむるは、洵に先進の責務ありと。然れども、ミルトンは文學を切賣りする者にあらざり、教育せしは懇請されし、且つ拉典語もて神學組織の書取をせしと云へば、最早ホルトンの時代の如く閑なること克はさりしなるべし。

ミルトンの教育法は如何なるものなりしか、今は之れを知らんこと、ただ易からずと雖も、蓋し當時の教育法とは大に其の赴きを異にし、極めて自由なる方法を取りし、あるべし。英國に於ても他國に於けると全しく、教育の理論も、其の實行も、初め太た暗澹たりしが、ペーコンの出るに及んで俄かに一光明を放ち、コメニアス繼て起り、益々ベ

イコンの所説を解釋布延して教育法の改善を企て、教授の時間を費すこと少ふして、生徒の智識を増加せしむること多からんことを計り。思らく、言語を學ぶは、言語を學ばんが目的にあらざして、頼て以て智識を得んが爲あり、されば、言語を活用して智識を得るに配めよ。目と耳とは智識を入るゝの門なり、されば活用して以て圍繞物より智識を得るに配めよ。記憶を強ふるは非あり、之れを強へん代りに、自から開發する所あらしめよ。これ蓋し教育界の新聲にして、當時の教育界に在りては、洵に一箇革命の聲たりしに相違なし。又たサミュエル、ハートリッップと云ふ者あり、父はボイランドの産なりしが、亂を避けて英國に來り、ハートリッップを教育して、全く英人となし、而してハートリッップは、千六百二十八年の頃より、居を龍動に卜して教育に従事せり。學識の深遠にして、論理の緻密ありしは、コメニアスに及ばざりしと雖も、亦た新説主張者の一人にして、夙にバリーコンに私淑し

て教育社界に新天地を開拓せんと欲するの念勃々たりき。而してハートリッップのミルトンを訪ふて、教育革新の事を談ずるや、二人の意見大に投合する所ありしを以て、新説はミルトンの筆に依りて、教育に就てと云へる紙數八頁の論文とありて現はれぬ。蓋しハートリッップの懇請によりて書けるあり。これ以てミルトンが如何なる方法に依りて子弟を教育せしかを察するに足るべし。ミルトン、教育を定義して曰く、人を導て、私務に於ても、公務に於ても、平時に於ても、戰時に於ても、正當に、熟達に、寛量に、總ての事務を處理せしむべく、成すを以て、完美なる教育とす。蓋し今日より察すれば、彼れが教育の理論には、不全完の點もあるべし、又た其の實施にも幾何の誤謬あるなるべし、然れども、理論精細なりと稱せらるゝ。今代にして、篤學に於て、道義に於て、舉動に於て、總て實踐躬行を以て子弟を卒ひし、ミルトン、其の人の如き者を求むれば、其の太た寥々あるを憾みずんばあらず。

初婚

活劇時代

千六百四十三年の初夏、龍動を去りて地方に遊び、殆んど一ヶ月を經て後、新夫人併に數人の親戚と共に歸り來り、宴をエルダスグートの家に張りて新婚の披露をなしぬ。ミルトン時に三十五、夫人十七。夫人名をマリーと呼び、父はフォレストヒル地方の名族にして王黨に屬し、名をリチャード、パウエルと云ふ、新夫人は其長女あり。抑もミルトン、單獨の生活を營みしこと、三十餘年、身は清閑に、富みて、心は文學の光明に照され、快樂常に多かりしが、結婚後、未だ幾何ならずして、家内の的の不幸、職業の切要及び失明等、災禍連り、困若備さに、嘗てこれ稱せられ、身窮して語益々巧と稱せらる。さればミルトンの前半生は、慶幸多福にして寧ろ詩人たるに適應せず、後半世の數奇遭こそ、洵に

活劇時代

憫まんのや。彼れが常に私淑せしものと云はんか、數奇何ぞ必ずしもミルトン等の比肩す。新夫人に美姿ありしか、あらざりしかは、傳紀家の之を傳へざるを以ての故に、知るに由なきも、ミルトンガ新夫人を愛せしは疑もなき事實なるが如し。戀は人をして盲せしむ、如何に聰明にして如何に剛邁なる人物と雖も、一たび戀に當てらるると、時は忽ち之が爲めに、魔せらるゝと云ふ。ミルトンは固より清教徒、風の嚴格と德行とを有せりと、雖も清教徒必ずしも戀を容れず、徳行者も亦た情を解せずとせんにや、ミルトンの心は優に婦人の弱姿を容れて餘りありしことありに、二十の時、一少婦に逢ふて眷戀措く、克はさりしことありき。後、伊太利に遊びし時、ボログナの途上に、南國の美姫を見、痛く心を動かして、彼の美の爲め、二篇の小歌を作りしことありき。されば、

初婚

活劇時代

其、フオレストヒルに遊んでマリ、一を見るや、十數年に、一小女を見、若しくはボログナの途上に南國の美姫を見たる時、一様の情緒は、端なくも再びミルトンを捉へたりしるべし。彼れ實に、婚をマリ、一と結へば、極めて幸福多かるべしと考へぬ、かく考へしかばこそ婚せしむれ、去かれども豫想は事實を持ち來たすを誤れり。年若き花嫁マリ、一は、ミルトンを愛するの心、家政の煩はしきに堪ん心に勝つ克はず、共棲すること僅かに一ヶ月許りにして、遂に言を消夏に托し、ミカエルマス祭に歸り來るの約を以て、此年七月、フオレストヒルある父母の家に出けり。既にして暑氣漸く退き、ミカエルマス(九月廿五日)の日も亦た到りぬ、而して夫人は歸り來らざるあり、歸り來らざるのみならず、一片の信書さへも來らざるあり、こゝに於て書を裁して歸りを促かせしも、返書だも來らず、再び書を裁して歸りを促かせしも、復た沓として返書たもあし、かくの如きこと再三、ミルトン痒癢に堪へず

活劇時代

やありけん、人を倩ふてフオレストヒルに赴かしぬ、而して使者要領を得ずして歸れり。事既に斯の如し、こゝに於てミルトンも亦た斷然マリ、一と絶たんとどの心を生し、之が爲め「離婚の道理併に教訓」と題せる小冊子を著はせり。冊子の大要に思らく、夫妻精神の不調和の如き、苟も自然にして、枉く可らざるものは、若し彼等にして兒あくんば、又た彼等に於て一致せは、寧ろ離婚すべきを正當とす。實際は如何にもせよ、これ實に離婚を不正、不義、不徳と宣告せる宗教者の目より見れば、洵に一箇の反旗たらずんばあらず、此の冊子は、再版の時に至りて署名せしか、初版には著名の署名なしに發刊せり、然れども讀書眼ある者は、忽ち文体に考へて、ミルトンの作なるを察知したりと云ふ。此項國內益々紛擾し、且つ蘇格蘭も亦た太た穩かならざるの風ありしも、「離婚論」は相應に世人の注目を促がし、間もあらず版を重ねるに至りしが、宗教家には痛く嫌惡せられ、イピスコパル派よりも、プレスビ

テリアン派よりも、共に激烈なる論難と批評とを蒙れり。人皆な自家の立論を以て正確なるものと思考するの心あるのみならず、併せて以て神聖ありと思考するの心あり、況んや自ら信ずることの厚きミルトンの如き人物に在りては、論難攻撃の聲あるが爲め、少しにても自説を變するが如きことをなす者にあらず、全く自己の考究と論理とを以て、正當にして動かす可らざるものと信し、其の結果として、ドクトル、デピスの一女と結婚せんとせり。或は云ふ、ミルトンがプレスビテリアンの強敵となりしは、實に此時より始まれり。

既にして王黨の勢次第に傾き、フォレストヒルの邊は戦争最も嚴烈にして、死屍累々、民、生を案する能はざるを以て、パウエルの一家も、亦た亂避けて龍動に來りしが、財産を蕩盡して窮乏交々臻り、殆んど如何ともすること克はざる場合に至れり、之れに反して、國會軍は連りに戰ふて連りに勝ち、其の勢益々盛るしを以て、王黨に反對せるミ

ルトンの名聲も、亦た從て次第に高まれり。かゝりけり程に、パウエル一家、思らく、吾家此の如く、ミルトン彼れの如し、若かず、マリーをミルトンの許に送り還し、且つ一家彼れか保護を仰かんにはど。幸にしてミルトンが屢々出入せる家に、パウエルの親戚ありければ、一夕ミルトンの來るを候し、マリーをして其の家に潜ましめ、ミルトンの應に歸らんとせし頃、不意に出て、足下に跪き、涕を吞んで前日の事を詫ひ、以て再び家に歸らんことを求めしめたり。温情なるミルトン、争てか之れを拒み得ん、直に之れを諾し、エルダスゲートの家は狹隘なりしを以て、バヒカンに移り、マリー一人のみならず、パウエル一家の人々を合せて悉く之れを引き取りぬ。評する者往々「極樂隨落」の中、イブ、アダムの前に跪き、凄然として涕を垂れ情を含みて怒りを解かんことを求めければ、アダム、怒氣忽ち消滅して心和らさける様を紀せるは、疑も無く表本をこゝに取れるありと云ふは、蓋し誤察にあらざる

活劇時

べきか。既にして父死しければ、バビカンの家は餘りに廣きに過くるを以て、家をハイ、ホル、ポーンに求めて移りぬ。チャレス一世の死刑まで住せしはこの家なり。既にして千六百四十八年マリ一始めて一子を産み。爾來引きつゝきて三子を産みしが、千六百五十二年の夏、第四兒の産るゝと共、共に産所に死せり、時に年二十六、ミルトンに嫁してより九年目なり。

散文時代に入る

活劇時

ミルトン何故に希臘に遊ばすして、伊太利より歸りしか本國の仁人義士、自由の爲めに、寢食をも忘れんとするに、己れ獨り海外に優游するは、義に於ては忍びざる所ありとなし、古文明の産地、ホーマーの故土に入らずして踵を旋らしたるなり。されば其の歸るや、直ちに筆を

活劇時

擲て劔を取り、國會軍に投して戦ふ可きが如くなり。然れどもミルトンは自ら知らざるの愚物にあらず、筆を操て國に盡すと、劔を操て國に盡くすと、國に盡すに於て、優劣あきのみならず、時としては筆の用に優れるを知れり。況んや劔を以て、國事に盡くさんよきは、寧ろ筆を以て盡くさんことの、彼れに於て長處なるは、深く自ら信する所。されば千六百四十二年十一月十二日、龍動市民の志ある者、皆な起て、チャレス王のヨークに赴かんを遮りし時にも、彼れ尙ほ起たず、家に在りて子弟に授け、又た卷を横へて靜かに古人を友とせりき。然れども冷々として國事日に非なるを傍觀せんは決して彼の志にあらず、唯だ夫れミルトンの力を要すべきの機會は實に未だ來らざるあり。既にして機會は來りぬ、散文の著作即ちこれなり。想ふにミルトンは、何かる事情に逢ひ、又た何かる掠迫に逢ふも、決して國教派に加擔し、若しくは王黨に投ずべき小丈夫にあらず。蓋しミルトンは智識の世界

散文時代に入る

活劇時代

に。夢。み。た。り。し。べ。ー。コ。ン。の。夢。を。以。て。拉。し。來。り。て。之。れ。を。政。治。の。社。會。に。
現。實。に。せ。ん。と。冀。望。せ。し。な。り。彼。れ。固。よ。り。武。人。に。あ。ら。ず。即。ち。文。に。頼。て。
以。て。之。れ。を。果。さ。ん。と。望。み。し。な。り。こ。に。於。て。千。六。百。四。十。年。よ。り。全。六。
十。年。に。至。る。ま。で。殆。ん。ど。二。十。年。の。間。は。天。職。た。る。詩。學。を。擲。ち。去。て。ミ。ユ。
一。オ。と。遊。は。ず。俗。の。俗。な。る。政。界。に。立。ち。交。り。て。散。文。に。従。事。し。數。箇。の。小。
冊。子。を。著。は。し。て。政。治。論。に。忙。は。し。か。り。き。
ミ。ル。ト。ン。は。固。よ。り。純。乎。た。る。清。教。の。徒。に。あ。ら。ず。然。れ。ど。も。生。平。清。教。徒
に。向。ふ。て。全。情。を。表。す。る。こ。と。深。か。り。け。れ。ば。千。六。百。四。十。年。以。來。國。事。日
に。益。々。非。に。し。て。教。界。の。事。亦。た。益。々。非。な。る。を。見。る。や。自。由。を。愛。し。眞。理
を。愛。す。る。の。心。坐。し。て。之。れ。を。見。る。に。忍。び。ず。英。國。宗。教。改。革。論。等。數。箇。の
小。冊。子。を。著。は。し。清。教。徒。を。助。け。て。國。教。を。攻。撃。せ。り。清。教。徒。元。來。文。藝。を
卑。視。し。て。顧。み。ず。故。を。以。て。文。學。技。藝。雄。辨。等。の。上。に。於。て。は。到。抵。國。教。派
に。企。て。及。ぶ。べ。く。も。あ。ら。ず。さ。れ。ば。ミ。ル。ト。ン。の。助。け。は。宛。も。大。旱。の。雲。霓

活劇時代

に。於。ける。が。如。く。之。れ。を。得。て。以。て。清。教。徒。の。氣。焰。頓。に。百。倍。せ。り。蓋。し。清
教。徒。の。中。に。も。文。藝。に。名。あ。り。し。者。絶。無。に。あ。ら。ず。指。を。屈。し。て。之。れ。を。數
ふ。れ。ば。二。人。を。得。一。は。ハ。ン。プ。シ。ヤ。ー。の。人。に。し。て。チ。ョ。ー。デ。ウ。イ。ザ。ー。と
云。ひ。詩。稿。を。賣。て。國。會。軍。の。軍。資。を。助。け。し。程。の。熱。心。家。な。り。他。を。ア。ン。ド
リ。ユ。マ。ー。ベ。ル。と。云。ひ。後。十。八。ヶ。月。の。間。拉。典。秘。書。官。と。し。て。ミ。ル。ト。ン。の
助。手。と。な。り。王。政。回。復。し。て。チ。ャ。レ。ス。二。世。位。に。在。り。し。際。は。ハ。ル。區。の。代
議。士。に。撰。出。せ。ら。れ。ホ。イ。グ。ビ。ユ。リ。タ。ン。に。屬。し。て。尙。ほ。頻。りに。王。政。に。抗
し。且。つ。詩。文。を。以。て。王。政。を。譏。刺。せ。し。人。あ。り。然。れ。ど。も。文。藝。を。以。て。王。黨
に。敵。せ。ん。に。は。二。人。の。か。固。よ。り。之。れ。に。堪。ゆ。べ。き。に。あ。ら。ず。而。し。て。之。に
を。補。ひ。得。ん。は。唯。た。一。人。の。ミ。ル。ト。ン。の。み。ミ。ル。ト。ン。の。國。會。黨。に。欠。く。へ
か。ら。ざ。り。し。や。知。る。へ。き。あ。り。

を「大教師管轄論」とす、此冊子は、國教派の高僧アッシャーの議論を駁撃したるものにして、アッシャーは年高く、學も亦た高く、國教派中有名の高僧なり、而してミルトンは年僅かに三十を越へたるばかりの壯年書生にして、名も亦た未だ博く世人の聞知する所とあらずしが、斯の壯年書生が批評の嚴正にして、筆鋒の激烈ある、流名の老僧も避易したりと云ふ。三を「セミクナムナス辨」と云ひ、僧正ホールの議論を駁せしものなり。四を「教會政治論」とす、同じく國教を攻撃したるあり。夫れ敵に向ふて槍を投する者は、又た敵よりも投せらるゝの覺悟あかる可らず、ミルトン既に槍を投ず、反撃豈に來らざらんや。ホールの子某、ミルトンが嘗て大學に在りし時の私行を評し、針小の事件を捧大にし且つミルトンは連りに遊戯に耽りて、屢々惡處に通ひたりと云ふが如く、無かりし事をも有りしかの如くに捏造し、嘲笑を極め、罵詈を逞ふせり。おゝに於てミルトン之れに答へんが爲め「雜辨」を著

はす、之れを其の五とす。全四十三年「離婚論」の著あり、全年又た「教育論」の著あり、而して全四十四年には「アレオバギチカ」の著あり。「アレオバギチカ」は出版の自由を論議したるものにして、文字堂々、光焰萬丈、ミルトンが散文中の最傑作と稱せられ、後世の珍とする所也。蓋し當時の出版法たる頗る不自由に於て、千五百五十六年「マリー」位に在りし頃、書籍商の同盟官許を得て成り、爾來總ての出版は、悉く同盟の承諾と、官の檢閲とを経ざる可らざるととなり、且つ星院は法を設けて犯者を罰することとなれり。千六百四十年、國會勢力を得るに及んで、星院を廢滅したりと雖も、出版の自由尙は行はれずして、苟も出版をあるさんには官の檢閲を経て其許を得ざる可らず、唯其の檢閲者は、前日の如く龍動の僧正にあらずして特別委員とありしのみ。こゝに於てミルトン斯書を草して國會に提出し、出版の自由を促したりしも成功なくしてやみき。全四十五年に「基督誕辰の朝」「ラレグロ」「ペンセル

「等英語及び拉典語を以て歌ひし詩篇を編輯して公刊せり。

拉典秘書官

千六百四十九年一月三十日、チャレス一世の王冠、そが頭上より落ちて泥に委し、一國の大權、全く國會の掌握する所となれり。然れども實際の權力に至りては、クロムウェル以下、國務評定官四十一箇の左右する所にして、評定官等が權力の宏大ありしこと、古今未曾有と稱せらる。此時に當りて、外國事務には、ホワイトロック、バートン、レスリー公爵、デーンベール公爵、マーテン、等の諸名流あり。雖も、拉典語秘書官として未だ適當の人物を得ざりけり。抑も當時に用ゐられし、國際文書は、多くは拉典文なりければ、外國朝廷より來れる文書を反譯し、若しは外國に向ふて文書を發せんには、是非とも拉典文に精通し、又たくは、

活劇時代

巧みに拉典文を草するの人を要せざる可らず。ミルトンは獨り拉典語に精通したるのみならず、併せて廣く各國の當代語に通曉せるを以て、若し國會黨にして適當なる秘書官を得んと欲せば、ミルトンを置いて他に人なしと云ふも可なり。これより先き、國會のチャレス一世を刑するや、昨日までは國王と尊はれ、陛下とうやまはれし人にして、士百姓、素町人等の爲めに刑戮されしを見て、坐るに王家を憫むの情を生じ、暴横殘虐よと國會を罵殺するは、獨り王黨の人に止まらず、中立黨にも、將た又た嘗て國會に味方せし者の中にも、和して以て國會を非難する者、續々として起りぬ。こゝに於てミルトン、一書を著はして之れを辨ず、王及び官人の借地論と題せるものこれなり。此の冊子發刊後、未だ幾何あらずして、又た一冊子を公にす、題して、オーモンド伯と愛蘭叛人との平和條約論と云ふ、皆な王家に逆て國會併に民人を辨護せしものにして、此時に當

拉典秘書官

活劇時代

りて、國會及び民人を辨護するは、取りも直さず、自由の形体と其の精神とを辨護するに他ならず。以上の二冊小子を公にするや、須臾らく筆を政治と宗教との論に絶ち、静かに書を読み、文を講じ、更に政界の紛擾には與り知らざるものと如し。其の「英國史」の編述に着手せしは、實に此の際にして、まばらありて第四卷までを脱稿し了んぬ。然るに政府に在りては、プロウエル、リチャード等、早く既にミルトンを文學大に用ふるに足るを知り、此時も招くに拉典秘書官の職を以てせり。想ふに詩人は、ミルトンの天職あり、彼れを捨て、役人たるへきか、抑も役人たるの招きを辭して、詩人的生活を追ふべきか。若し夫れ役人たるれば、詩人たるを克はず、詩人たるは、固より、自由を愛するの者、其の孰れをか擇はざるべからず。ミルトンは、固より、自由を愛するの爲め、邦國の爲め、大に盡し得ん

活劇時代

は論をかきなり、然れども、役人として、即ち自由を壓迫して、邦國の進途を妨げん王政を轉覆したる政府の一員として、自由の爲め、邦國の爲めに盡すを得べし。加之、彼れ貧なり、就令官とありて、糊口するの意をかかりし、因となれり。思らく自家ミルトンの心を誘ふて、政府に入り、政府の一員として、筆を操て、政府の爲め、意見を全ふせん。政府に入り、政府の一員として、筆を操て、政府の爲め、遂に此年の三月十五日を以て、秘書官の職に就けり。是より後、益々交を時の政治家、議員、軍人等に結ぶこと多く、之れか爲め、政治上、社會上に於ける實際的識見を増進せしこと、鮮少にあらざらんと云ふ。史家云ふ、後日、大史詩の大成就しは、秘書官時代の經驗も亦た與りて大に力あり。秘書官として、彼れの本務は、外文に關する拉典文の反譯と、其の起草となりしかば、日々の事務は、頻繁からざりし、時として、或は

拉典秘書官

活劇時代

カハムウエル、或はリチャード、或は國會の命に應じて、文書を作る、この少からず、之れが爲め、十年間に、百三十七箇を、草するに及び、且つ常に半官報の姿、わたり、マキユリアス、ポリチカス、を監督し、又時どいては、通辨として、働くと、あきらめ、遊はん程、閑なる、この克は、ざるは、論、あ、く、又、た、時、ど、い、て、は、國、會、を、辨、護、せ、ん、が、爲、め、散、文、の、小、冊、子、を、辨、護、せ、ん、が、爲、め、若、し、く、は、一、身、を、辨、護、せ、ん、が、爲、め、寧、ろ、身、を、著、作、せ、し、こ、と、常、に、絶、へ、ず、こ、れ、固、よ、り、其、の、辭、す、る、所、に、あ、ら、ず、寧、ろ、身、を、此、の、繁、激、の、際、に、投、し、て、一、奮、戰、せ、ん、と、は、彼、が、志、望、あ、り、け、ん、も、ミ、ユ、イ、ズ、と、は、愈、々、益、々、疎、隔、せ、ざ、る、を、得、ざ、る、に、至、れ、り。

活劇時代

ル先づ愛蘭土に赴き、激戰數回にして之れを平定し、後、又た蘇格蘭をも平定せしが、愛蘭土の役、叛徒を鑿殺せしこと頗る夥多ありしを以て、誹謗の聲、頗る高し、「觀察」は答て以て、クロムウエルの行爲を辨護したるものなり。次に現はれしを、「イコノクラステス」とす、斯書は「偶像の破壊者」と云へる意義にして、語は偶像破壊に熱心ありし、希臘諸王の異名より取れり。此時に當りて、博士ゴードンと云ふ者あり、「イコンバシルキ」と題せる一書を著し、國王の慘狀を細述して國民に訴ふ、而して著者の名を偽はりて國王陛下自身の遺作とし、ゴードンは唯た之れを編纂せしのみありと云へり。ゴードン素と思想富膽の人にあらずしと雖も、頗る文辭を行るに長し、此書一出、一時殆んど讀者の心目を鼓動し、チャレス并に王家の慘狀を想像して戰慄せしめぬ、而して此書は、實に國內到る處に傳播せしに止まらず、廣く大陸に行はれて、忽ちにして板を重ねること十四に及び、後四十七に及べり、こ

に於て國會は打ち捨て置くべきにあらずとなし、當時博識を以て名ありしシエリデンに托して反駁書を稿せしめんとせしが、遂にミルトンを起草せしむをことゝあせり。ミルトン命を受けて以來、思を構へ、文を練ること數月、稿の全く脱せしは千六百四十九年十月の頃にして、紙數殆んど二百四十二頁に充ち、インデペンデント黨の見解を以て、痛く王家を攻撃し、王の處刑を以て正當にして正義なりと辨せり。然れどもジョンソンは之れを評して曰ふ、書籍としては、格別の價直あるものにあらずと。次ぎに現はれしものを「英民の防禦」とす。斯書はミルトンの散文中「自由出版論」と比倫せん程の傑作と稱せらるゝ所のものにして、同じく王家攻撃の書とす。抑も千六百四十七年、チャールス二世亂を避けてハーギユに在りし頃、ライデン大學の教授サルマシヤスなるものと友として善かりき。サルマシヤスは佛蘭西に生れ、當代著名の鴻儒にして、最も拉典文に精しく、自ら謂ふ拉典

語を以て文を綴らんは、母國の語を以て綴らんよりも容易なりと。且つや彼れの手に成れる拉典文は、平易華麗、絶へて贅牙拮据の嫌なく、殆んど水流れ、鳥歌ふの妙あるを以て、頗る當時世人の愛讀する所となりき。こゝに於て、チャールス二世思らく、托して以て父王一世の言行を紀述せしめ、頼て以て父王の爲めに汚名を雪かんは斯人に若く者なけん。即ち托するに此事を以てせり。既にして「チャールス一世及び二世の防禦」と題せる冊子、和蘭に於て印刷せられ、千六百四十九年の暮方、突如として英國に輸入し來りぬ。流石はサルマシヤス教授の筆記せしものあれば、文意兼ね備はり、痛く讀者の心を奪ひ、其の人心を動搖せしこと鮮少にあらず。こゝに於て政府之れを黙々に付する能はず、又たミルトンをして之れが反駁を草せしめ、同五十年三月稿を脱し、名づけて「英民の防禦」と云へり。想ふにサルマシヤスは、當代有數の碩儒にして、特に拉典語に精通せる者なりと云へば、ミルトン如何

活劇時代

い。わ。懐。の。は。り。答。け。詞。以。辭。底。に。
て。り。の。満。洵。も。文。て。を。て。積。企。拉。
殆。し。氣。身。に。直。を。文。潤。之。せ。て。典。
ん。な。泪。に。ミ。さ。成。辭。色。れ。る。及。文。
ど。ら。々。は。ル。ザ。せ。を。に。を。大。ぶ。に。
餘。ん。ど。敵。ト。ミ。し。成。す。サ。思。べ。長。
蘊。宜。し。懐。ン。ル。な。せ。に。ル。想。き。し。
な。哉。て。の。天。ノ。も。に。於。マ。ど。に。た。
ト。ミ。綴。の。如。せ。を。争。り。が。ス。他。に。者。ど。
ハ。ト。の。き。て。争。り。が。ス。他。に。者。ど。
是。ン。人。は。英。贊。て。こ。め。き。に。り。獸。語。
新。り。り。國。の。交。と。に。ぬ。夫。り。政。罵。の。外。
進。長。と。に。意。を。大。著。述。れ。て。府。り。逐。に。
の。す。て。は。を。ミ。に。し。セ。ル。反。對。者。の。も。
一。る。一。驚。ル。セ。ト。此。も。ト。對。者。の。も。
文。と。驚。ル。セ。ト。此。も。ト。對。者。の。も。
士。二。十。歳。せ。り。と。云。ふ。聞。く。此。時。
れ。老。儒。と。云。ふ。聞。く。此。時。
は。王。黨。の。人。も。圓。願。
の。し。て。人。も。圓。願。

活劇時代

仰。サ。巧。ル。者。の。譽。受。を。著。攻。な。虚。
く。ル。み。ヲ。に。各。を。け。巴。書。擊。り。飾。
所。マ。な。ン。し。國。博。て。理。の。す。ど。を。
に。シ。る。ド。て。公。す。國。に。公。る。し。發。
し。ヤ。拉。の。遠。使。べ。會。燒。行。に。山。摘。
て。ス。典。學。く。等。き。を。き。を。至。師。し。
ミ。の。文。者。書。は。材。辨。護。い。せ。り。魔。は。
ル。齡。を。輩。の。寄。き。と。せ。ロ。し。此。時。文。法。
ト。ミ。綴。の。如。せ。を。争。り。が。ス。他。に。者。ど。
ハ。ト。の。き。て。争。り。が。ス。他。に。者。ど。
是。ン。人。は。英。贊。て。こ。め。き。に。り。獸。語。
新。り。り。國。の。交。と。に。ぬ。夫。り。政。罵。の。外。
進。長。と。に。意。を。大。著。述。れ。て。府。り。逐。に。
の。す。て。は。を。ミ。に。し。セ。ル。反。對。者。の。も。
一。る。一。驚。ル。セ。ト。此。も。ト。對。者。の。も。
文。と。驚。ル。セ。ト。此。も。ト。對。者。の。も。
士。二。十。歳。せ。り。と。云。ふ。聞。く。此。時。
れ。老。儒。と。云。ふ。聞。く。此。時。
は。王。黨。の。人。も。圓。願。
の。し。て。人。も。圓。願。

拉典秘書官

活 劇 時 代

黨の人も將た又た。黨派外の人も、苟も二家の書を讀みし者は、皆な心に、老將と新勇士との勝負を氣づかひ、老將新勇士に勝つか、抑も新勇士、老將を壓するかの疑問を懷き、筆戦を見物せんと片唾を呑んで待ち構へたりしど。サルマシヤス、ミルトンの反駁書を得て、通讀二三回、忽ち流暢なる拉典文を以て、稿を行き、其の迅きこと飛か如く、忽地にして反駁を反駁せること三百餘頁に達せり。まかれども彼れ之を公にするに及はずして、千六百五十二年九月、日耳曼のスパに死せり。或は云ふ、彼れの死は狂死ありと。三百餘頁の長反駁書は、後、千六百六十年、即ち王政回復の時に至りて發刊せられぬ。此の筆戦に於て、チャルマシヤスの原稿の料をサルマシヤスに拂ふ程富有るさりしかば、サルマシヤスの所得は一物もあらず、ミルトンも亦た秘書官としての俸給の外は、著書の料としては一仙も得る所あかりしと云ふ。蓋しミルトンが秘書官として、の俸給は、一ヶ年二百八十八磅十三シリング。

活 劇 時 代

に。して。之。れ。を。今。日。の。英。國。通。貨。に。改。算。す。れ。ば。殆。ん。ど。九。百。磅。に。至。り。而。し。て。今。日。の。爲。替。相。場。に。改。算。す。れ。ば。殆。ん。ど。九。千。圓。許。り。と。なる。職。を。秘。書。官。に。奉。し。て。よ。り。官。衙。の。近。傍。に。住。す。る。に。あ。ら。す。ん。ば。不。便。多。き。を。以。て、ハ。イ。ホ。ル。ボ。シ。の。家。よ。り。移。り。て、ホ。ワ。イ。ト。ホ。ー。ル。の。近。傍。に。住。居。せ。し。が、幾。何。も。な。く。し。て、又。た。チ。ャ。ー。リ。ン。グ、ク。ロ。ー。ス。移。り、又。た。セ。ン。ト。チ。エ。ム。ス。公。園。に。近。き。ス。ー。ダ。モ。ア。公。爵。の。隣。り。に。移。れ。り。妻。が。第。四。兒。を。舉。げ。て。死。せ。し。は、此。家。に。し。て、二。回。目。の。妻。と。し。て、キ。ャ。ピ。テ。ン、ウ。ィ。ド。コ。ッ。ク。の。女。を。娶。り。し。も、亦。た。此。の。家。な。り。而。し。て。彼。の。女。が。一。子。を。舉。ぐ。る。と。共。に。産。處。に。死。せ。し。も、亦。た。此。の。家。に。し。て、後、王。政。回。復。の。時。ま。で。住。居。せ。し。も。亦。た。此。の。家。な。り。此。時。に。當。り。て、ミ。ル。ト。ン。の。健。康。痛。く。衰。へ、視。力。も。亦。た。益。々。弱。く、就。中。左。眼。の。明。は、千。六。百。五。十。年。の。頃。よ。り。業。既。に。之。れ。を。失。し、醫。師。は。連。り。に。讀。書。と。著。述。と。に。耽。け。ら。ざ。ら。ん。こ。と。を。勸。告。し、若。し。ま。か。せ。ず。ん。ば、右。眼。の。

拉典秘書官

活劇時代

明を併せ失ふべしと云へり然れども彼れは讀書と著述とを寛ふ
するをささぐりき蓋しミルトンの母は視力極めて弱く傳紀家の傳
ふる所にいれれば三十歳を越へて後は眼鏡を用ふるべく余儀なくさ
れしと云へばミルトンの幼より視力弱くして遂に盲するに至りし
は明を用ひしことの過度かりしに坐すも抑も亦た遺傳によりら
ずんばあらず既にして千六百五十二年の春に至りて憫むべし右眼
の明も亦た全く之れを失ふに至り時に年四十三想ふに明あるも
爲す所寡きものは明を失ふと雖も失ふ所多からざるが其の明ある
が爲に爲さんと欲す所若しくは爲す所多き者は明を失して失ふ所
も亦た多し世人の書籍を愛讀するは多くは娛樂を求めんが爲めな
るも學者は全く之れに反し之れを以て生命と爲し天職となすされ
ば學者より書籍を取り去れば確に或點に於ては自殺に異ならず故
に知るべし書籍より見て俗人の明を失するは單に娛樂を失ふに過

活劇時代

ぎざるが學者の明を失するに至りては殆んど天職より閉され生命
より閉され智識より閉さるゝあり其の失ふ所の多き問はずして可
なり然れどもこれ以て大天才家を律し得へきか否大天才は明を失
して全く之れを失するにあらず左丘明左傳を著はして盲し盲して
後又た國語の著あり馬琴著述等身にして盲し而して八犬傳の一部
分は實に盲後の作にかゝるハオセツト肯し盲して後大經濟書の著
あり若し夫れ明を失して文學的生產は之れと同時に停止せざば
後人焉んぞ極樂墮落の大作に接するを得んや蓋し大天才は猶ほ狂
氣の如し狂氣者の荒れ廻るや實に吾れあるを辨知せざるあり大天
才家も亦た斯の如く其の思を詩に文に若しくは彫刻に構ふるや恍
惚とて我れ吾れを忘れ唯た筆の走り刀の躍るを見るのみ狂氣と
天才との相同し殆んど斯の如きあり刀の躍るを見るのみ狂氣と
構ふるに及んで固より吾あるを知らざる也盲と不盲と何かあら

活 劇 時 代

ん。大。天。才。は。實。に。盲。し。て。亡。す。べ。き。に。あ。ら。ず。況。ん。や。其。の。刻。苦。推。敲。も。亦。た。決。し。て。尋。常。作。家。の。比。に。あ。ら。さ。る。を。や。知。る。べ。し。盲。後。に。於。て。極。樂。墮。落。サ。ム。ソ。ン。ア。ゴ。ニ。ス。テ。ス。等。の。大。成。せ。し。は。偶。然。に。あ。ら。ざ。る。を。ミ。ル。ト。ハ。既。に。盲。す。と。雖。も。彼。れ。に。し。去。れ。ば。拉。典。秘。書。官。の。空。位。を。充。た。す。に。適。當。の。人。な。さ。む。以。て。尙。ほ。職。を。解。か。す。助。手。わ。り。て。助。け。職。務。に。鞅。鞅。す。る。こ。と。盲。せ。ざ。り。し。時。の。如。く。毎。朝。七。時。の。出。勤。の。如。き。も。更。ら。に。怠。る。所。あ。ら。ざ。り。き。

活 劇 時 代

ざ。る。處。あ。く。而。し。て。一。方。に。於。て。は。著。し。く。王。黨。を。賞。揚。し。て。サ。ル。マ。シ。ヤ。ス。に。及。び。筆。鋒。一。轉。し。て。ミ。ル。ト。ン。に。向。ひ。全。し。く。痛。撃。痛。罵。を。極。め。ぬ。冊。子。の。著。者。は。名。を。ペ。ー。タ。ー。ド。モ。ー。リ。ン。と。云。ひ。佛。國。の。カ。ル。ビ。ニ。ス。ト。に。屬。せ。る。モ。ー。リ。ン。と。云。へ。る。者。の。一。子。に。し。て。後。王。政。回。復。し。て。チ。ヤ。レ。ス。二。世。位。に。昇。り。し。時。カ。ン。タ。ー。ベ。リ。の。牧。師。に。舉。げ。ら。れ。し。人。な。り。モ。ー。リ。ン。の。此。書。を。著。は。せ。し。や。英。國。に。て。刊。す。る。こ。と。を。な。さ。ず。遠。く。和。蘭。に。送。り。佛。國。傳。道。師。ア。レ。キ。サ。ン。ド。ル。モ。ラ。ス。と。云。へ。る。者。に。托。し。モ。ラ。ス。の。管。理。の。下。に。發。刊。し。て。之。れ。を。英。國。に。輸。入。せ。り。然。れ。ど。も。著。者。の。姓。名。を。明。記。せ。ず。單。に。モ。ラ。ス。の。序。文。を。の。み。掲。載。せ。し。を。以。て。讀。者。多。く。は。誤。り。信。じ。ぬ。元。來。モ。ラ。ス。自。身。の。著。す。所。と。あ。し。ミ。ル。ト。ン。の。如。き。も。亦。た。實。に。爾。か。信。じ。ぬ。元。來。モ。ラ。ス。は。道。德。の。修。ま。ら。ざ。り。し。人。に。し。て。特。に。婦。人。に。對。す。る。の。道。德。の。太。た。紊。れ。た。る。人。あ。り。き。ミ。ル。ト。ン。は。固。よ。り。か。れ。の。如。き。攻。撃。を。默。過。す。る。者。に。あ。ら。ず。直。に。筆。を。揮。て。王。血。叫。の。非。を。辯。駁。し。て。國。

會と自身とを護り、且つ其の高潔なる拉典文を以て、モラスの汚行を發摘攻撃して殘すゝく、傍ら出版者をも詰責せり。時に千六百五十四年五月、題して「第二の防禦」と云ふもの即ちこれなり。若し夫れモラスは「王血叫」の著者にあらず、彼れは依頼を受けて單に出版を周旋せし迄に於て寧ろ影武者にもあらず、著者は別にモリスなる者のありしを思へば、かれの如きミルトンの躍起反駁は、殆んど滑稽芝居に類し、亦た殆んどアケルアンの代りに愛すべき小羊を鞭答せしと云ふアジャツカス其人にも類せり。然れども其の之れありしが爲め、其の勉學、其の旅行、其の性質、其の失明及び其の擊劍に長ぜる等の事、悉く當代と後世とに知れ渡るを得て、其の自らの防禦となりしや少小にあらざるとす。第二の防禦は殆んど彼れが自傳と云ふも不可なきあり。幾何もあらず、モラス、ミルトンに答へて一書を著はす。題して「フヒデス、パブリカ」と云ふ、而して翌五十五年八月、ミルトンも亦た「自衛」と題

せる小冊子を著はして、之れに答へぬ、ここに至りてモラスとの筆戦は全く了れり。聞説らく、嘗て瑞典との條約文を取り換はせし際、ミルトン所勞ありて、筆を取る能はず、之れが爲め數日を延期せんことを申し込みしに、瑞典の公使は、英國政府には拉典文を綴り得へき者、僅かに一人にいで、而かも其人は盲人かど疑ひ且つ怒れり。

ミルトンの散文

評する者云ふ、ミルトンの文体は莊重典麗にして氣に富み、力あり、英語のあらん限りは、必ずや師表として尊重せらるべしと。又た評する者あり、ミルトンの散文に對しては、バースの最良なる演説も、殆んど之れが爲めに顔色なからんとするものあり、其の章句は華麗にして

绚烂なりと。又た評する者あり、ミルトンの文は言はんと欲する所のものを言ひ、言はんと欲する所盡きて筆も亦た止まり、筆唯た意に従て走る、されば時としては、句法錯雑して透明を欠き、順序散漫して、整はざるが如く思はるゝものなきにあらざらぬ。又た云ふ者あり、ミルトンは詩人なり、ミュージズの愛兒あり、故にミルトンにして散文を草するも、其の句、其の調、悉く詩風を帯ふると、猶ほロングフェローの散文の如きものあるべしと思はるゝも、ミルトンの散文は決して詩的口吻を以て充たされたる散文にあらざらぬ、さればミルトンならんには、尙は多く詩的調子を帯び、尙は多く想像的文字に富むべし、この文は蓋しミルトンの文にあらざらぬと思はるゝなきにあらざるが、ミルトンの文は、表面に於てこそ詩調を帯びず、詩的文字を駢列せずと雖も、其内面に至りては、悉く詩的文字と、詩的觀察とを以て組成され、彩色され、經とあり緯となりて彼れが思想を現出せし八千の言語は、悉くこれ

詩なりと、又た曰ふ者あり、ミルトンの文、之れを誦すれば、圓滑流麗にして、中止すべからざる如きありと。要するに、此等の評言は二十年の間、に於て英文を以て記せし二十一種、拉典文を以て記せし四種の小冊子に就き、各々其の一斑を探り當てたるものにして、此等の諸評言を合して以て始めて全豹を伺ふに足らんのみ。蓋しミルトンが詩人として、その名聲頗る高く、詩に就ては、一も解する所なき、没眼兒と雖も、「極樂墮落」が世界有数の大史詩にして、其の著者は、デヨン、ミルトンと稱する人ありと云ふを知る程なれば、之れが爲め散文家としてのミルトンは、蔽はれて以て應に有するべき丈けの名聲を有せざるの傾向なきにあらざらぬ。

晩年

年表

千六百六十年二月王政回復す。

千六百六十三年三婚す。

此年デッホー生る。

全五年疫病龍動に流行す。

全六年龍動大火延焼七日に

及ぶ。

千六百六十七年「極樂墮落」を刊

す。

千六百七十一年「極樂回復」サム

ソン、アゴニステス」を著はす。

外部

千六百六十三年ルイ十四世親

政を始む。

全二年アデッソ生る。
千六百七十四年十一月八日死す。

全七十三年モリエール死す。

八十

千八百二十三年「基督教論」
を刊す。

晩

年

王政回復後のミルトン

革命に二種あり、一を進歩的の革命となし、他を反動的の革命となす。蓋し進歩的の革たるや、時としては建設を忘れて破壊に流れ、徒らに人を殺し、家を焼き、産を蕩するの傾向なきにあらずと雖も、大抵精命あり、希望あり、信向あり、活潑々地、正々堂々として太陽一出、百怪逃走するの勢あり、斯の如くにして、民の耳目を一新し、國の元氣を振作し、革命の爲めに費せし總てのものは、革命事收まりて後、新たなる總てのものとして歸り來るなり。之れに反して、かの反動的革命に至りては、希望もあらず、信向もあらず、精命もあらず、其の勢力は痲痺にして、其の所措は忘動のみ。其の根原は不平にして、其の目的は復古のみ。痲痺、盲動、不平、復古の革命、畢竟國家民人の慶幸に於て何をか資せん。其の結果、徒らに人をして卑屈ならしめ、利己ならしめ、苟安を求めて雄大の措置を忌ましめ、逸豫を貪りて艱難を恐れしめ、正義と云ひ、愛國と云ひ、

王政回復後のミルトン

八十一

若しくは名譽と云ふが如き高尚ある觀念に至りては、蕩然地を拂ふて見るに處なからんとす。想ふに千六百六十年、王黨志を得てチャレス二世佛より歸り、圓顛黨仆れて王黨之れに代りしは、政治に於ても、宗教に於ても、若しくは風俗習慣に於ても、王黨の勝利たりしは論なく、抑も亦た思想文藝の上に於ても、王黨の勝利にして、英國の天地は全く王黨のものど化せり。王黨素華美を競ひ、圓顛質朴を尙び、王黨素酒を使ひ豪を鬪はし、圓顛黨之れを惡む、王黨素文藝を弄し、圓顛黨之れを卑む、されば其政治、宗教等は之れを惜み、單に之れを文藝に見るに、王黨の中、固より文辭に秀て、詩藻に富み、且つ識見高き人なきにあらざりしが、如何せん、反動的革命の通性として、總ての空氣沈滞して活氣なく、浮華相尙び、誇張徒らに之れ黽めて、國振はず、人勵まず。斯の如くにして十七世紀英國の名譽たるべき、寧ろアングロサクソン語の名譽ある大史詩は、勝を制したる王黨の手裡より出でずして、却て

取れたる黨派に歸せる盲目翁に依て作られぬ、これ以て反動的革命の取るに足らざるを知らん。熟ら々々ミルハインが思想遷轉の跡を考ふるに、明かに數回の遷轉ありしを認むるあり。其の年少時代に在りては、格段に宗教上の意見、若しくは政治上の意見として言ふべき程のものを發見すること克はざるが、千六百四十一年、即ち彼れが三十三歳の頃は、清教徒的にして、又た一部分はブレスタリアンの的なる傾向もありき。何となれば、力を極めて教會政治を攻撃せしむ、而も全然教會を打破すること願ふに至らざりき。且つ其の翌四十二年、教會政治の理を著すや、書中の文辭處として、王黨を庇保するあるを見る。ミルトン爾かく王黨を庇保するの口吻あるも、王黨的的思想を有して、國會に敵するにあらざりしは勿論ありとす。而して千六百四十九年の頃に至りては、自由人權の思想、澎湃として心中に鬱勃せるを見る。若し當時に於ける黨派的

王政回復後のミルトン

れ出さんとする婢馬を繋ぎ留めむの力なく、危機日一日より急に荒
 眼閉ち、肉冷へて地下に入るや、後繼リチャードの材幹は、到廷將に荒
 しも滔天の勢有りし共和黨も、勢漸く衰へ、命脈次第に迫り、大鐵漢の
 盛ありて衰あり、輿ありて亡來る、シロムウエルの晩年に際しては、さ
 も亦た寧ろ盲目的にシロムウエルに協賛したるの觀あきにあらず。
 は宛も王黨が盲目的にシロムウエルに反對せしと、蓋し此時に當りて
 に支配せらるるムウエルにあらざり、唱へぬ蓋し此時に當りて
 又た全くの勢力を振ひ、一にして議會を蹂躪し去るに及んで、彼れ
 仆したるの勢力を振ひ、一にして議會を蹂躪し去るに及んで、彼れ
 りければなり、而して千六百五十年以後、即ちシロムウエルが王朝を
 用の長物なり、打破すべしとの説は、口々に、筆に、常に唱へて止む
 か、何なれば、國立教會は無用の長物なり、打破すべし、王權政治は無
 の名稱を以てせば、疑もあく、獨立派と云へる、圈内に入るべかりしな

て宛も千鈞を繋げる一髮、斷絶立つに到らんとするか如し。ミルトン
 即ち二箇の小冊子を著はして奮戦し、以て衰勢を挽回せんと、務めし
 が、大勢の傾く所、椽大の筆力も之れを如何ともする能はず、共和黨四
 分して五裂し、ミルトンも亦た拉典秘書の職を捨て、ペテラ、ラハス
 の住家を遁れ、八月二十九日、特赦令の出するまで、友人の家を潜
 み居たり、其の職を捨て、王位に昇りし數週前の事ありき。若し夫れ革
 命の亂に加擔して、或は戈を取て、王黨の人を殺し、或は冊子を放て、人
 命の動搖せし者は、これ洵に大不忠、大不義、大逆臣なりと、悉く捕
 へて以て死刑に處するを適當かるとせば、二十年間に二十有五種の
 小冊子を放ち、或は國教を攻撃し、或は王政を攻撃し、或はチャイルス一
 世の刎首を以て適法の處置なりと辨し、王政を攻撃し、或はチャイルス一
 護し、國會を辯護し、革命を辯護し、たると、辨し、王政を攻撃し、或はチャイルス一

王政回復後のミルトン

ては、罪最も重且つ大にして、軽くとも、王宮の門前、群集山の如きの處、除るに斷頭台上にのぼせて、不臣の罪を正たすの價直あり。武の代表者が、其の死後、墳墓より發掘せられて辱からしに較すれば、文の代表者が身首すら處を異にせざりしは、寧ろ僥倖なりと云はんか。抑も王政の回復は、ミルトンが政治上、社會上、宗教上に於ける運動の最終局にして、爾來宗教を議せんが爲め、政治を論せんが爲め、若しくは王黨を攻撃せんが爲めに、小冊子を著はさず、只管に作詩にのみ耽りたりき。案するに、千六百六十年六月十六日、チャレス二世、命して以て「英民の防禦」イコノクラステス等の書を焚かしめ、而して又た檢事長は告發狀を發し、警官を發してミルトンを物色し、逮捕せんとせり。此時に當りて、議院にマーベル、モリス、トーマス、クラーク等の諸名士ありしが、此等の諸名士は皆みルトンの舊知なるが上に、デーブナントと云へる者あり、ミルトンを放免せんが爲めに、辯護太た電めた

り、デーブナントは從來王黨に屬し、此時正に桂冠詩人の職にありき。彼れ嘗て圓顛黨の捕ふる所となり、將に殺さるべかりしを、ミルトンの爲に助けられしかば、ミルトンの危急なるに及んで、舊恩に酬ひんが爲め、百方辯解奔走して救助せしなりと云ふ。デヨンソンは之れを嘲りて生命の交換と云へり。かく諸名士の救護ありしかば、越て數月、即ち斯歲八月、大赦の令出るに逢ひ、全く晴天白日を仰くるを得たり。然れども頭を回して前日を追想すれば、共に俱に革命に幹旋せし諸名士にして、或は命を斷頭台上に落せし者あり、或は熱涙を呑んで獄窓の下に俯仰する者あり、多情多感あるミルトン、豈に悵然として悲み、撫然として嘆せざらんや。

大赦の後、再びホルボーンに住し、幾干もなくしてヂェン町に移り、エリサベス、ミンシユル女と婚せり、之れを三回目の結婚とす、ミルトン時に年五十四、ミンシユルの年は考ふ可らず。傳紀家の言ふ所によれ

は、ミンシユルは良家の女にして、又た能くミルトンに事へたりと云ふ。三回目の結婚後、未だ幾何ならずして、王、ミルトンを招くに拉典語秘書官の職を以てせんとせしに、彼れ應せず、妻の之れを強ゆるに及んで、怒て曰く、汝は他の婦人の如く馬車に乗らんことを願ふか、余が目的は唯た正義の人として生活し、正義の人として死せんことを願ふのみ。蓋し道徳、正義はミルトンが處世處身の大本にして、國教と王政とは彼れが蛇蝎視する所なり、彼れは之れが爲めに伊太利漫遊より歸り來れり、之れが爲めに二十五種の小冊子を著述せり、今ま焉んぞ王政の下に立て、そが秘書官たるべけんや。若し夫れヲヤレス二世に^心して、果してミルトン其人を惡むも、苟も文學其のものを愛するの心^わらば、授くべきは唯た夫れ桂冠詩人の位置か。抑も千六百三十二年、即ちミルトンが業をケンブリッヂ大學に卒へたるの時は、正に是れベン、ジョンソンが桂冠詩人となりてより十有三年目にして、後五

年にして逝けり、既にしてチャレス一世國會と争ひ、既にして出奔し、既にして殺され、爾來共和と稱するもの二十年、而してチャレス二世位に昇りて王政回復せり。王黨の中、固より文人詩客に乏しからず、之れを中立派中に求むるも亦た詩人、文士を得難しとせず、然れども眞に英國を裝飾せん底の詩人を求めて、之れを榮し併せて以て英國を榮せん^榮と欲せば、ミルトンを置て夫れ誰れぞ、チャレス、没眼之れを察せず、區々の俗業秘書官を以て招かんと欲す、ミルトンの來らざるは論^論るべきのみ。況んや桂冠詩人の職を以てす^ふと雖も、辭を低ふし禮を厚ふ^ふするに^あらずんば、彼れ斷して來らざるに於てをや。ミルトン^天子一呼して直に船に上るの小漢ならんや。

王政回復以來、再び身を學藝の一方に委ねし結果として先づ「文法書」の編述ありき「文法書」は固より片々たる小冊子にして、其の意、専ら初學に便するに過ぎずと雖も、當時頗る紊れ居たる語法句法を匡正せ

王政回復後のミルトン

年 晩

ん一方ともなれりきと云ふ。
 ミルトン明を失してより以來、連りに拉典語を讀まん人を得んと心
 掛け居たりしに、此頃漸くクエカー宗徒にして名をエルウッドと呼
 ぶ若者を得たり。エルウッドは讀み聞かせて賃錢を得んが目的には
 あらで、老詩人と對話して己が知識を増進せんと希へり。されば日曜
 日を除き、毎日午後に至れば、必ずミルトンを訪ひ、其の聽かんと欲す
 る拉典文を讀み聽かせぬ。蓋しミルトンが復た又た家を移し、パンヒ
 ル、フイーールドに住せしは此頃にして「極樂墮落」の起草に着手せしは
 即ちこの家なり。デボンシャーの僧正ドクトル、ライトと云へる者、ミ
 ルトンに此家に訪ふたる紀事に云ふ、ミルトンは狭き部屋に安樂倚
 子にかかれば、顔色は蒼白なれども死人の如くあらざり。只た手及び指
 は、かたくなにして自由ならざるが如くなり。ヨーク公の訪ひ來り
 しも亦た此家なり、傳ふる者云ふ。一日、チャレス二世の弟ヨーク公、往

年 晩

てミルトンを見んことを請ふ、王之れを許す、公即ちミルトンを訪ふ
 て閑談す、稍にして卒爾として問ふて曰く、卿が盲や悲むべし、然れど
 もこれ先王に敵對せし天罰ありとは思はざるや。ミルトン色愠れど
 も禮恭ふして答へて曰く、閣下は予の盲を以て天罰ありと思はせらる
 もや、若し然りとせば、予か天罰は先王よりも輕し、見そなわせずは明
 を失するに止まるも、先王は生命を喪ひ玉ひぬ。公、此の答に不快を感
 じ、俄かに辭し去れり。公の歸り來るや、王問ふて曰く、卿、ミルトンに逢
 ひしや、曰く逢へり、曰く、真あり、曰く、何故に殺し來らさか、しや、曰く、彼れ老
 せりとは真か、曰く、真あり、曰く、何故に殺し來らさか、しや、曰く、彼れ老
 ひ且つ貧にして盲せり、これ既に足る、陛下宜しく彼をして生きしめ
 よ。好公子、其の言頗る愛すべき所あり。

王政回復後のミルトン

「極樂墮落」の歴史

晩

英國を裝飾せん程の大傑作を完成するにあらずんば、就令ミルトンの体は地下に入るも、其の靈は尙ほ且つ瞑すること能はざるあり、畢生の大願洵にこゝに在り。こゝに於て王政回復の前より、早く既に「極樂墮落」の著述に志ありき。然れども拉典語を以て草を起さんか、抑もアングロサクソン語を用ひんかは、久しく心を苦めし疑問なりしが、國を愛するの心は、斷然國語を用ふること決し、千六百四十二年の頃、既に其の數節を記せりと傳ふ。或は傳ふ、當時は之れをドラマにせんず志なりしが、後之れを本事詩に改めたるなりと。爾來全五十六年まで稿をつかず、五十六年に至り、再び稿を繼ぎしも、僅かに數節を記するに止まりぬ。後、王政回復して、政治界より追はれて以來、専ら心を此處に集め、或は終夜にして一句を成す克はざることあり、或は滔々

年

晩

泪々として一氣に數十句を呵成することもあり、かくの如くにして全六十三年に至りて略々脱稿し、後、或は加へ、或は削り、或は改め、或は淨書し、斯の如くすること數回、千六百六十五年に至りて全く完璧を成すを得たり。「極樂墮落」完成の歲、疫病龍動に暴横し、南陌西阡死する者相枕籍し、實に十二萬人の多さに達せりと云ふ、英國史上に大疫病として特筆する所のもの即ちこれなり。こゝに於てミルトン疫を避けんが爲め、忘年の友エルウッドの助けによりて居をカルフォントに轉じぬ。此時エルウッドの需めに應じて「極樂墮落」を貸して讀せしめしに、草を返すに及んで、エルウッド老友に語て曰く、卿の書「極樂墮落」を記すること精細高妙、固より毫髮の遺憾なし、知らず、極樂開基に付て何の言ふ所ぞと。傳を立つる者曰ふ、エルウッドの此言は端なく、ミルトンを刺撃し、後彼れが「極樂回復」を草するの端緒をなせりと。翌年疫病の熄むや、大火龍動に起り、殆んど全市の三分の二を灰燼して、

年

人心悩々たり、ブレット町あるミルトンの舊家も亦た實に災に罹れり。蓋し天災の頻りに臻る、往々人をして厭世の心を起さしむ、殊に詩人の如きを然りとす。然れどもミルトンは薄志小膽の人にあらず、且つ此時に當りて正に「極樂墮落」出版の計畫ありて、前途の希望多く、これが爲め神氣少しも沮喪せざりき。時に出版免許の權は、カンターパーリー僧正の握る所ありしかば、僧正の許可を請ひ得、千六百六十七年四月二十四日「極樂墮落」の原稿を書肆サミュエル、シモンズなる者に賣り渡せり、代價金五磅。今日の爲替相場に改算すれば、殆んど我が五十圓許に於て、初版にして幸に千三百冊以上を賣るを得ば、尙ほ五磅を拂ひ、再版にして亦た幸に千三百冊以上を賣るを得ば、尙ほ五磅を拂ひ、三版に於ても亦たかくすべしとの約なりき。然るに初版は出版後二年を経ても漸く亦た賣り切れ、全七十四年に至りて再版し、全七十八年に至

りて三版せしも、再版の年はミルトンの體業既に地下に入りて之を知る由なかりき。後二年を経、千六百八十年十一月廿一日、ミルトン未亡人は八磅に賣り渡し、千六百八十三年八月を二、十五磅にてエルマールは頗る高價を十七日及び九月十年三月二十四日の兩度に、エルマールは頗る高價を以て又た之をチャコプトンある者に賣り渡せり。蓋し發刊以來、名聲年を追ふて高まり來り、拉典、伊太利、佛蘭西、和蘭等の諸國語に反譯さるゝに至りければ、版代價の八磅、二十五磅等漸次に高まり來りしは之れが爲めなりとす。蓋し初版は一冊の代價三シリングを我が國の詩人に見るに、快劍山を斬り、天馬空を駛するが如き大作は、

「極樂墮落」の歴史

大抵四十歳以下、若しくは其前後に成り、五十を越ゆれば想像力大に衰へ、詩詞亦た乏しく、僅かに既得の名聲を保て、世人の尊敬を繋ぐに過ぎず。歐米に在ても、亦た大抵然るが如し。按ずるに、千六百四十五年、ミルトン生平作る所の詩篇を輯集して之れを公にす、時に年三十七、四十歳に充たさるること僅か三年。想ふに、ミルトンをして尋常一様の詩家ならしめば、千六百四十五年に出版したる詩集は、洵に彼れが最高潮時代の詩集にして、「コマス」「ライシダス」等の諸篇は、彼れが詩詞中の明星精粹と云はざる可らず、而して後世詩人をしてミルトンを論せんは實に斯等を以て表的とあさむを得ず。然れどもこれ天のミルトンを降たせし所以にあらざる、彼れは之れを以て單に早熟の一粟實を世人に贈與したるに過ぎざるのみ。若し夫れ紅纒々、味澤々たる大果實は、秋風郊墟に満ちて、霜華瓦を染むるの時を待たざる可らず、彼れも人なり、我れも亦た人あり、彼れ之れを能くして、我れ之れを能

晩

年

くせず、怪も亦た極まらずや。人固より天分に高下の別あり、然れども徒らに天分を云ふ、未だ盡さざるなり。蓋し英傑と云ひ、俊秀と稱せらるゝは、希望常人より多く、空想常人より大に、而して常に其の大なる空想と、多き希望とを充實せしめんと欲して休せざるものを云ふ。一の小希望を完ふし、一の小空想を充たすを得ば、志忽ち満ち、氣忽ち驕るが如きは、これ斷して英俊にあらざるなり。志と云ひ、希望と云ひ、空想と云ふ、字異れども意は大抵相同じ。七八歳の時、英氣煥發して後來偉大の名を成さんが如く思はれ、二十左右にして才藝衆に抽で師友の敬する所となりし者にして、漸く長するに及んで漸く衰へ、三十、四十にして、全く常人と異なる所あきに至る者少からず、これ他なし、彼れが氣力、空想の幻影を捕へ、希望の私語を追ふべくやみたるによる。これ固より天分の低きに坐すと云ふと雖も、抑も亦た人事を盡くすの足らざるが故のみ。見よ、頑是るき小學校の兒童、或者は總理大臣たら

晩

年

政回復後のミルトン

晩

んと欲し、或者は陸海軍の大臣たらんと欲し、或者は裁判所若しくは郡役所の役人たらんと欲し、或者は醫師たらんと欲し、或者は八百屋たらんと欲し、或者は學者たらんと欲し、或者は米屋たらんと欲し、或者は貿易商たらんと欲し、或者は航海家たらんと欲し、十人にして十人の希望あり、百人にして亦た百人の希望あり、而して永く此の空想と希望とを追ふ者は、或は幸にして之れを得る者あり、或は不幸にして得ざる者あり、此れを得たる者こゝに英傑とあり、得ざる者凡人となる。ミルトンが大詩人となり、希望せしは、既に八九歳に於て之れを見る、而して二十三にして衰へず、四十五にして衰へず、夫れ斯くの如く、彼れは幼より壯、壯より老と、常に希望を跡つけて偷ることあかりければ、詩人の最後と云はれたる四十歳を越へ、而して四十五歳を越へ、而して五十歳を越へて後「極樂墮落」の大篇を大成せしは、以ふしとせず。謂ふ勿れ天分のみと、天分固より然り、然れども、其の人

年

晩

事を盡くしたるの跡も亦た歴々として指すべからずや。宜なるかな、コレリッヂは「極樂墮落」を以て、ホイマー、ダンテに優るとなし、ハラムも亦たダンテの上在り、とある。唯た夫れ何人も國自慢の心あり、これを以て同國人なるコレリッヂ、ハラム等の言、或は過譽に傾けるの嫌あきにあらずと雖も、ホイマー、ダンテの作と併せて以て世界の大史詩となすは、蓋し換ふべからざるの定論ならん。

ホルテルの説によれば、ミルトン南國に遊ひし時、フロレンスに於て「アドモナ」と云へる滑稽芝居を見たり、そは人間の墮落、天使、蛇、死、等を以て經緯したるものなりしが、彼れ之れが爲め大に動かされ、その可笑しきものより轉換して遂にかの大史詩を成せりと。果して然るや否を知らず。

年

王政回復後のミルトン

「極樂墮落」の大綱

「極樂墮落」は世界屈指の大史詩にして、卷を頒つこと、十有二、句數一萬五百六十五、歐米の學者にして之れが註釋を作り、若しくは之れが大綱を散文にせし者一二にして足らず。茲處に掲ぐには大綱の大綱のみ

年 晩

第一卷 は人間の不從順と、そが不從順より起て、永劫の住所と定められたる極樂園を失ひし原因の如何を詠歌せんことを詩神に乞ふに始まり、次て其の墮落の第一原因は、蛇に憑りたるサタンの誘惑に在るを説き、轉してサタンは神に背き、天使の數群を誘ひて味方に引附けたれば、神勅によりて其の徒衆と共に天國より驅逐せられて、大溟渤に至れるを説き、かくて後、筆鋒又一轉して去りて、地獄に墮落したるサタン及び其衆徒の事を記せり。此處に所謂地獄とは、慘憺陰鬱、聞く者をして毛髮を豎たしむべきかの暗黒處、即

「極樂墮落」の大綱

「極樂墮落」は世界屈指の大史詩にして、卷を頒つこと、十有二、句數一萬五百六十五、歐米の學者にして之れが註釋を作り、若しくは之れが大綱を散文にせし者一二にして足らず。茲處に掲ぐには大綱の大綱のみ

第一卷 は人間の不從順と、そが不從順より起て、永劫の住所と定められたる極樂園を失ひし原因の如何を詠歌せんことを詩神に乞ふに始まり、次て其の墮落の第一原因は、蛇に憑りたるサタンの誘惑に在るを説き、轉してサタンは神に背き、天使の數群を誘ひて味方に引附けたれば、神勅によりて其の徒衆と共に天國より驅逐せられて、大溟渤に至れるを説き、かくて後、筆鋒又一轉して去りて、地獄に墮落したるサタン及び其衆徒の事を記せり。此處に所謂地獄とは、慘憺陰鬱、聞く者をして毛髪を豎たしむべきかの暗黒處、即



乞ふに始まり、次て其の墮落の第一原因は、蛇に憑りたるサタンの誘惑に在るを説き、轉してサタンは神に背き、天使の數群を誘ひて味方に引附けたれば、神勅によりて其の徒衆と共に天國より驅逐せられて、大溟渤に至れるを説き、かくて後、筆鋒又一轉して去りて、地獄に墮落したるサタン及び其衆徒の事を記せり。此處に所謂地獄とは、慘憺陰鬱、聞く者をして毛髪を豎たしむべきかの暗黒處、即



雪嶺寫

挿畫中雪嶺寫トアルハ雪嶺畫ノ誤

正 誤



ち最も適當の語を用ゐれば渾沌と曰ふべきの場所を指せり。これ
 此時に在りては、天も地も共に未だ創造せられざるものと思はれ
 たればあり。さてもサマンは衆徒と共に焰々として燃へ上る湖水
 の中に在りて、雷震を感じて驚駭しけるが、漸くにして心氣稍や回
 復し、宛も昏迷の醒めたらんか如きを覺えければ、ぬつくど起ち上
 り、ガリレオが發明したりと云ふ望遠鏡にて望たらん月の如き楯
 ど、軍艦の檣の如き槍とを携へ、湖岸に立て大音あげ、尙昏迷して眠
 り居たりし衆徒を打ち起しけるに、孰も皆あち上りて、與に墮落
 の不幸を語り合ひ、劍を抜て空を斫り再び天國に歸らんが爲め、多
 くは戦争の用意に取懸り、將校などを指名しけり。やがてサマンは
 衆に向ひて天國を回復するの望は尙は未だ絶えたるにあらざる
 とを慰諭し、又終りに際して天使の存在すること久しきに及びて、
 現實見るべきの創造あらんとは、上古より祖先の持論ありければ、

此の天國の傳説たる豫言に應じて、新しき世界と新しき萬有は、遠からず創造せらるべしと告ぐ。されば此豫言の實を探くるの要もあり、又之に就ては決心の次第もあれはとて、かれこれと商議を凝らし居たりしが、折りしも悪魔の一隊は、大湖より火水を引て一大鎔鑪を作り、之れに金塊を投せしに、サタンの宮殿パンデモニアムは宛も蒸發氣の如くに俄然として大溟渤を破りて崛起せり。かゝりける程に、地獄の貴族共は大に欣び、商議の爲め此裡に會坐せり。第二卷 やがて商議の始まりし時、サタンは金玉もて美々しく飾られたる一段高き壇上に坐を占め、議を建て、天國を取戻さん爲めに斷然一戰を賭すへきや否を問ひしに、惡魔モロツ起り立り、斷然一戰すべきを論せしを始めとし、或は非戰を唱へ、或は可戰を唱へ、議論紛々として一致せざりしが、結局は第三の謀議を採擇することとなりぬ。第三の謀議と云へるは、これもサタンの説きたる所

にして、其の趣意は、先づ近日中に創造せらるべしとの評判ある新世界に關するの豫言に付きて、先づそが虚實を探り、はた新たに造らるべき人種の、己等と同等なるべきや、若くは稍や劣るべきものなりやを明にせんとするに在り。かくて彼等は此の困難なる搜索を遂げん爲め、何人を遣はすべきやとて、使者の撰擇に惑へる折りしも、首領サタンは大膽にも單身挺前して之れか任に當らんと欲し、衆徒悉く其の勇壯なるに感服しぬ。茲に商議もいよいよ結了したれば、餘の人々は、各其の資性の宜きに從ひて、さまざまの道に就き、銘々勝手の業務を執りて時日を送り、偏へにサタンの歸來を待てり。さてサタンは飛行して地獄の關門に到りしに堅く鎖して入ること克はず、玄はし茫然たりけるが、門を守る者「罪」と「死」とはサタンの爲めに之を開きしかば、サタン大に欣ひ目を舉げて、地獄と天國との間に、一望際なき大江の横絶するを發見せり。然れども

敢て屈せず、此地の勢力たる渾沌の爲めに左右せられつゝ漸く之を通過して、かねて搜索せんと期したる新世界を見るに至れり。かくして地獄の門は開きたるまゝ再び閉さすなりぬ。

第三卷 折りしも神は玉坐に據て、新たに創造したる世界に向て、サタンの飛ひ來れるを眼下に見おろし玉ひ、右方に坐を占めたる神子を摩きて之を示し、サタンの必ず人間を誘惑せんことを豫言し、且つ人間を導て、之に自由と能力とを與へて、情感を裁抑するに足らしめ、萬穢を銷除して人間自身の正義と智識とを清淨にすべく、又た人間に仁恩を垂るゝ所以のものは、人間は、サタンの如くに己れの悪意よりして墮落したるにあらすして、サタンの爲めに誘惑せられたるに由るを宣へり。時に神子は、父君の此の有りがたき恩言を賛歎しけるほどに、神は再び宣はく、天の正義を甘諾するにあらずば、朕は廣く仁恩を人間に垂れまじ、人間は神性を貪得せん

晩

年

晩

年

とて、神の尊嚴を汚したれば、其の子孫と共に死すべし、且つや誰か別に其の罪を贖ふに足るものありて刑に服せざるべからずと。因りて神子は自ら之に當らんことを請へりしに、父君は許容ありて、其の降生を豫定し、神子の位は天地の間に在る萬衆の上に在ることとを宣言し、凡べての天使に命して羅拜せしめ、天使等は恭みて命に従ひ、又た歌班を備へ琴歌を奏して、神父子を賛頌せり。さて、サタンは斯の世界の外輪ある小高き處に下り、此邊に徨ひて、初めて一ツの場所を發見し、かくて熟らく其處に生息する萬有の如何なるものなるやを觀、是より階段を攀ち上りて天門に達し、水の蒼穹の上に流るゝを見、進みて日輪に近づき、日輪の攝政ウーリールを望見し、早くも身を變して更らに微賤ある一天使の装を爲し、新世界と、神の此に置き給へる人間を一覽せんとするの情切ありと言做し、人間の住所を問ひて案内を得、先つニフェーリッ山に向ふて急

さぬ。

第四卷 サタンは今まエデンの光景を望み、神と人間とに反し、獨力を以て企てたる惡計を實行せんとするの地に近きて、忽ち疑惑を生し、情慾、恐怖、猜恨、失望等の念を起し、が、終に害惡を遂げんものと決意し、極樂園に向ひて進み、園の界域を跳過し、形を變して、鶴と爲り、生命樹の上に留りて四方を見廻せり。かくて彼れ初めてアダムとイブとを見て、其形の秀逸にして、幸福の状あるに驚きしが、彼等を墮落せしめんと思ひ定めて、窃に彼等の談話に耳を傾けしに、彼等は智慧の樹の果實を食することを禁められ、若し食したらんには死刑に處せらるゝとを語り合ふを聞けり。因りて彼等を誘惑して罪を犯さしめ以て詭計を遂げんを企て、それより猶他の方法を用ゐて、更に彼等の狀況を知悉せんとて、此處を立ち去りけり。かゝりける折柄ウーリールは、日輪の光線に乗りて降り來り、極

樂園の守門者ガブリエールに戒告すらく、一妖精、溟渤を逃れ、形を變して一箇の善天使を装ひ、正午時我球体の傍を過ぎて極樂園の方向に向ひしが、後猛惡なる正体をエデンの北方ある山上に於て發見せり、恐らくはかれ來りて害をなさん、宜しく心せよ。而して翼ある勇士カブリエールは必ず翌曉までに之を見露さんことを約しウーリールは再び光線に上りて歸り去れり。既にして夜に入りたれば、アダムとイブとは相語りつゝ眠に就きしが、ガブリエールは、一番の組合を率ゐて園の四隅を廻り、又妖精の園亭に入りて兩人の眠に害を加ふるをもやあらんかどて、ふたりの勇強なる天使に命して亭を守らしめたりしに、果して天使は一妖精あり、イブの耳に就きて、夢中にイブを誘惑しつゝあるを發見したれば、妖精の抗拒するにもかゝはらず、難なく捕へてガブリエールの前に引き來れり。ガブリエール之を詰問せしに、答辭不遜にして反抗の意さへあり

晩

しが、遂に園外に飛ひ去られてけり。
 第五卷 東天のやうく白けぬる比ひ、イブは前夜の忌ましくし
 き夢をアダムに語りけるに、アダムは聽て快くは思はざりしも、猶
 之を慰諭して俱に與に日課に赴き、亭の戸前に朝たの祈禱を行へ
 り。神は人間に答ふからしめんとて、ラフェールを召し、サタンが人
 間を陥れん爲め暗黒處を経てエデンに赴きたれば、其の従順と自
 由財産とに就きて教誨する所あらしめ、又た宜しく彼等を陥れん
 とする大敵を警戒すべきを説き、其の大敵の何ものなるや、何か故
 に敵なるやを示し、且つ何事にもあれ、アダムの知りて有益と爲る
 ものは、漏れなく之を諭告せしむ。是に於てラフェールは極樂園に
 降り來れりしに、時しもアダムは亭の戸間に坐して遙にラフェー
 ルの降り來るを認め、出て迎へて亭中に伴ひ入れ、イブと俱に摘み
 あつめたる園中の最も嘉美なる果實を供へて之を饗し、卓子に憑

年

晩

りて相語れり。ラフェールはアダムの地位と敵とに就きて懇ろに
 戒告する所あり、且つアダムの請ひに應じて、敵の誰なるや、如何に
 して敵と爲れるや等、初めサタンが天國に在りて背叛せしより、當
 時の事情に至るまで悉く之を話し、又た如何にして彼れは此の北
 部に其の衆徒を導き、又た如何にして衆徒を説伏して叛を企つる
 に至りしや、又た此時獨り天使アブデイルのみありて其の慇懃
 に従はず、論諍反抗して、遂に辭し去れること等を物語れり。
 第六卷 ラフェール語を續きて、勇邁なるミカエル及びガブリエ
 ールの、サタン及び其の徒と戦はんか爲めに送られたるの状を説
 き、引きつゞき第一戦を話す。さてもサタンは勇を鼓し荒れに荒れ
 て戦ひしが、到庭天使軍に敵する能はず、夜に入り衆徒を收めて引
 き退き、會議を開きて怪しげなる器械を發明し、第二日の戦に之を
 用ゐて、ミカエル及び之れに屬する天使を擾亂せしが、天使軍は山

年

を引き抜きてサマソンの軍勢並ひに器械を掩覆せしも、魔軍を全滅するに至らざりければ、神は第三の日に神子メツシアを遣はしたり、メツシアは即ち神の嘗て勝利の名譽を蓄へ置きて之れに與へんとしたるものあり。メツシアはやがて父の力に頼りて戰場に來り、戰略を案し其の軍隊をして悉く兩側に整立せしめ、直ちに戦車と雷霆とを驅りて敵中に進入し、ミカエル等力を奮て之に乗し、大に魔軍を撃破し、最後の牆壁にまで追ひ詰めたり。かくて壁門の開きしほどに、敵は戰栗混亂して、かねて溟渤の中に彼等を刑せんが爲めに設け置きたる刑場に飛び墜ちにければ、メツシアは凱歌を唱へて父の許に還れり。

息すべきの衆生を創造せんことを宣ひ、乃て神子を遣はして之に名譽を與へ、又侍者を附して、六日の間に創造の業を完成せしむ、天使等は賛美歌を唱へて之れを送り、以て功を成して再び天國に歸り來らんことを祝せり。かくて後神、光ありとへば光あり、空氣ありと云へば空氣あり、全く功を終へて歸るや、歌班を列して之れを祝せしを物語れり。

第八卷 アダムはラフェエルニ向ひ、かく天使の飛動自在なるは何故あるかを問ひかけ、るに不明の答を得、且此れよりも寧ろ智識を用ゐるの價ある事柄を探究すべしと戒められて、之に承服せしが、猶ラフェエルの留まらんことを願ひて、己れ自身の創造せられて極樂園に置かれし以來の記憶する所を語り、又た寂寞にして而かも適宜なる社會に就きて神と相語りしこと、及びイブと共に婚を結ひしことを語り、及び嘗て一天使の此處に來りて反覆丁

寧に彼等を訓誨せしこと、また互に相談話したることどもを告げたり。談了りて後、ラフェールは天に、アダムは閑亭に各々分れ去れり。

第九卷 サタンは身を脱してガブリエールの手を這れて後、人間を墮落せしめんと欲するの悪心益々堅く、今や地球を繞りて、熟慮したる詭計を抱き、夜に乗して霧の如くになり、再び極樂園に潜み入りて眠れる蛇の体中に憑れり。翌朝アダムとイブは常の如くに出て、日課に就きしが、此時しもイブは各場所を分ちて業を執らんと申出でたり。アダムは曾て天使より敵ありて夫妻を伺ふと戒告せられたる其敵の、或はイブが獨處を窺はんことを恐れて、獨りく、に働くとの危険なるを説きて承諾せさりしかば、イブは小心翼翼決して過なからんことの諒とせられざるを悲み、飽くまでも相離れて行かんことを言張れり、其實は寧ろ己のが強力の程を試

晩

年

晩

年

みんとするの願ありき。かゝりければアダムも今は如何ともする克はずして遂に之に従ひ、兩人相分れて働くことゝなれり。果せるかな、蛇は計略の機に投せしを欣び、イブの獨處を見て巧みに之に近き、初めは瞳を定めてイブを守り居たりしが、稍やありてイブを讚め稱へ、萬物の上に位すと爲し、少からぬ賛辭を呈して話しかけたり。イブは蛇の善く説話するを聴き、驚き且つ怪みて問ひけるやう、汝如何にして人言に達し且つ理會力を得たるや、是れ未だ曾て聞かざる所ありと。蛇は益々辭を卑ふして、美世界の女王陛下よと言ひかけ、尙ほ語をつきて此の園中に在る某樹の果實を味ひたるに由りて、此時までは毫しも解せざりし言語にも達し、道理をも知ることを得たりと答へ、且つイブにして之を食はんを欲せば何時にても取り來るべしと云ひぬ。さてイブは蛇に請ひて其實果を取り來らしめ、始めて其の嚮に禁せられたる智慧の樹あるを知れ

り。此時蛇は益勢を得、種々の贊辭を用ゐて巧みに食はんことを勸説し、遂に之をして食はしめたり。イブは其味の美あるを嘉みし、アダムにも分與せんか、將た止みなんかどて、暫らくの間思ひ煩ひけるが、遂に之をアダムの前に持來りて、食はんことを勸め、且つ前の事實をもの語れり。アダムは之を聞きて初めの程は大に驚きしが、イブの遂に死を免れざらんことを知り、非常の愛情を表し寧ろ死なば一處と覺悟を定め、深くも其罪を咎めずして、已れも亦之を食へり、是より二人俱に的面の應報を得て、互に裸体を蔽くさんことを求め、又互に不和を生して相詰責し論争することあるに至れり。」

めんが爲めに神子を遣はせり。かくて神子は樂園に來り、二人を呼び出して、事實を尋問し、各々其の罪に應じて刑の宣告を與へ、然る後憐むべき衣服を以て二人に與へ纏はしめぬ。「罪」と「死」とは此の時に至るまで地獄の門前に坐はりつゝありしが、忽ち新世界に於けるサタンの成功に、驚くべき同情を表し、最早地獄に籠居せしめて親分たるサタンの跡を追ひて、人間の住地に到らんものと決意し、地獄より此の世界に通する四方の道路をば、更らに平易ならしめんとして、初めサタンが造りし道筋に従ひ、渾沌の上に廣大なる橋梁を架し、それより地球に向ひて引き延ばしけり。此の時に當りてサタンは成功に誇り、意氣揚々として地獄に還らんとする時なりしかは、端なく「罪」と「死」とに出遇ひ互に祝賀を陳べぬ。既にしてサタンはパンデモニアムに達し、衆の充ちくたる會場に、千計萬方して人間を踏れたるの成功を談し、眉昂り、氣激して頗る得々たりしが

賞賛を得んと思ひの外、却て滿坐の聽衆より詰責を受け、忽ちにして又た數頭の蛇に變し、それよりして彼の禁樹と爲り、衆の前に躍り來りて欺瞞を試みしに、衆徒は争ふて之れを圍繞し、果實を取りて貪り食ひしに、皆ふ塵砂を噛み苦き灰を食ふて苦痛せり。却て説く神は豫言すらく、神子は終極の勝を制して、萬有を新美にせんと。されども差當り天使等に命して、諸天と諸元素とに種々の變更を與へしめぬ。此時に當りてアダムは層一層墮落の狀を覺り得て痛く哀歎し、イブの慰言をも聞き入れずありしが、イブは飽くまでも之れを慰め、且つ彼等が子孫の上にも落ち來るべしと思はるゝ災難を避けんが爲め、猛斷を行はんことを勧めけるに、アダムは之を容れさりき。されども更に一計を案出して、蛇に復仇せんは、之れを子孫に委すべしとし、兩人共に懺悔と祈禱とを用て、先づ神の怒を解かんと決し、跪きて涙を垂れ赤心を捧けて許されんことを祈れり。

第十一卷 神子は、今方に懺悔しつゝある兩人の祈禱を父君に示し、彼等に代はりて其の罪を許さんことを請願せり。神は之を受けたれども、彼等は最早極樂園中に住むことを得すと宣ひ、彼等を立ち退かしめん爲めに、天使の一群を附してミカエルを遣はし、且つ先づアダムに未來の事を啓示せんことを命し給へり。ミカエルの降り來れるとき、アダムはイブに神異の兆候を示し、ミカエルの近けるを見て、出て之を迎へ、憫むべし此地を立退くべきの命を受けぬ。イブは悲しみ且つ悔い、アダムは陳謝したれども終に之れに服従したれば、天使はアダムを導て眼下に全地球を見下ろす山上に登らしめ、我前に坐して大洪水の時至りて全球悉く水に掩はれ、石船獨り北風に吹かれて或る山上に留まり、既にして水退きて人再び繁殖するに至るまで、地球上に於て起るべき萬般の事体を見

せしめぬ。

第十二卷 天使ミカエルはかく一世界終りて、又た一世界起るを語り、尙ほ語を續づけて大洪水以來將に續起せんとする所のもの、即ち人間が天に達せん高塔を作らんとする事、高塔建築者中に互ひに言語不通にゐること、アブラハムの事、モゼスがカナンに一國を創むること等百般の出来事を語り、又たメツシヤが人間の罪を贖はんが爲めに降生する事、昇天する事、其の他萬般の有様を説き聞かしたるに、アダムは此等の説話と約束とを聞き大に満足して其の心を慰むることを得てければ、ミカエルと俱に山を下り、此間眠り居たるイブを呼び起せしに、イブは好夢を結び、精神も落ち着きて平順とありて、夢中に神の助言ありしを告げ、アダムを促して此處を去らんと云へり。かくてミカエルは左右の手に兩人を導きて極樂園を出行かしめ、一行の天使等は威剣を輝かし永く留まり

晩

年

て園を守れり。二人は固より得心の上にて樂園を去りしなれど、戀々の情に堪ゆる克はず、幾度は振りかへりて樂園の方を眺めつゝ、寂びしき路を徘徊ひ行けり。

「英國史」「極樂回復」「サムソン、アゴニステス」

「極樂墮落」を公にして後、三年を経て「英國史」を公にせり。時に千六百七十年なり。此書は、殆んど二十年前に稿を起したるものありしが、政界に身を投してより、専ら政論の著作に従事し、小詩、小歌等の此際に成りしもの頗る多かりしが、此書の稿をつが暇なかりき。既にして王政回復の後、力を「極樂墮落」の完成に集めしを以て、又た稿を繼ぐ克はざりしが、漸く此頃にして脱稿するを得たるあり。漸く脱稿して之れを出版せんとせしに、卷中、サッソン時代の僧侶輩を攻撃せし文字

「英國史」「極樂回復」「サムソンアゴニステス」

晩

年

ありしを以て、檢閱官等思らく、これ疑もみく、借りて以て今の僧侶を
 護刺するなりと、即ち擅に削り去りし箇處少がらず、爲めに當時の刊
 本は史家としてミルトンの眞面目を見るを克はさりしと雖も、幸に
 して別に友人アンゼリーシヤーに贈りし完本ありしを以て、後十一
 年を経て、國初より長期國會までの完史を發刊するを得たり。又た全
 年「サムソン、アゴニステス」極樂回復の二大篇を脱稿し、翌年之れを公
 にせり。「サムソン、アゴニステス」は悲劇にして、其の大意は、サムソン既
 に囚はれ、且つ盲して父と共にガザに幽せられしが、饗應の準備の爲
 め、工夫として使役され、休息の際、全種族コラスなる者に訪はれ、コラ
 スに依て父が幽囚の釋されんことを乞ひ、父のみは出獄するを得ぬ。
 之ばらくありて父の許に、一ピブリユ人來り、サムソン怪力を顯はし
 て、フヒレスタイン人を鑿殺せし事をもの語るに了る、蓋し寓意あり、
 乃ち清教徒が勢力を回復し、再び王黨を壓して自由を恢復せんことと

晩

年

を望めるなり。「極樂回復」は文字の現はすが如く、「極樂墮落」の續稿にし
 て、長さ殆んど「極樂墮落」の五分の一だも充たず。大意は、基督が洗禮の
 後、廣野にさまよひしに、サマソンの爲めに誘惑せられしも、彼れ嚴とし
 應せず、遂に之れに勝つに了る。評する者往々「サムソン」の篇を以て「回
 復の上、墮落の下」にありとなす。後、僧正ウオターベリーなる者「サムソ
 ン」を數幕に分ちて舞台に上せんことをすゝめしが、未だ成らずして
 ミルトンは逝きぬ。蓋し「サムソン」はミルトンが詩篇の絶筆あり。
 千六百七十二年「ラマス式」に從ての論理新説と云へるを著はし、且つ
 法皇黨の勢日に高まるを慨し、拉典語以て「基督教論」を著はせしが、太
 だ激烈なる筆鋒を用ふるをゑさむりき。此書當時に行はれしや、否を
 知らず、降りて千八百二十三年、國書局の故紙中より發見せられ、全二
 十五年に至り、チャルス、サンマーに依て英譯され、出版されぬ。マコー
 レー之れを評して曰く、固より傑作とは稱するに足らと雖も、文辭虚

晩

年

飾を用ひず、頗る愛すべしと。爾來、詩集を増補改版する等の外、格段記すべき事なく、千六百七十、四年十月十日、更に苦痛の狀なく、寂焉とす。て、バノ、ヒ、フ、ロ、ル、ド、の、家、に、逝、け、り、時、に、年、六、十、六、遺、體、は、ク、リ、ツ、シ、テ、バ、ノ、ヒ、フ、ロ、ル、ド、の、家、に、逝、け、り、時、に、年、六、十、六、遺、體、は、ク、リ、ツ、プ、ル、ゲ、ト、セ、ン、ト、ゲ、ル、ス、オ、キ、年、を、經、て、千、七、百、三、十、七、年、人、あ、り、彼、れ、が、半、云、ふ、の、な、り、き、後、六、十、三、年、を、經、て、千、七、百、三、十、七、年、人、あ、り、彼、れ、が、半、身、像、を、ウ、エ、ス、ト、ミ、ノ、ス、タ、一、ア、ベ、一、に、置、け、り。

習慣、家内

ミ、ル、ト、ン、其、幼、年、の、頃、は、毎、夜、十、二、時、過、刻、に、あ、ら、す、ん、ば、寢、に、就、か、さ、る、慣、あ、り、し、が、明、を、失、ふ、て、以、來、夜、九、時、に、し、て、寢、に、就、き、夏、は、毎、朝、四、時、に、冬、は、五、時、に、起、き、出、る、こ、と、い、な、し、起、き、出、す、る、や、先、つ、人、を、し、て、ヒ、ブ、リ、ユ、語、聖、書、の、一、節、を、讀、ま、し、め、七、時、に、至、り、て、讀、書、せ、し、め、食、事、の、後、或、

は、午、餐、ま、で、筆、記、せ、し、め、午、餐、を、了、れ、ば、庭、中、を、散、歩、す、る、か、或、は、鞞、に、の、り、て、運、動、す、る、か、ま、か、ら、ず、ん、ば、オ、ル、ガ、ン、を、奏、し、時、ど、し、て、は、自、ら、歌、ひ、又、た、時、ど、し、て、は、妻、を、し、て、歌、は、し、め、か、い、り、け、る、後、再、び、人、を、し、て、讀、書、せ、し、め、六、時、に、至、り、て、已、み、同、八、時、ま、で、客、に、接、し、八、時、に、至、り、て、オ、ル、イ、ブ、或、は、淡、泊、な、る、食、物、を、取、り、煙、草、を、薰、ら、し、水、一、杯、を、呑、み、九、時、に、し、て、寢、に、就、く、冬、夜、は、酒、を、以、て、水、に、代、用、す、る、を、例、と、せ、り、き、と、傳、ふ、ミ、ル、ト、ン、の、家、内、に、就、て、は、不、快、常、に、多、か、り、し、が、如、し、彼、れ、嘗、て、思、ら、く、婦、人、は、一、國、の、言、語、を、解、す、れ、ば、足、る、外、國、語、は、婦、人、に、於、て、要、な、し、と、こ、に、於、て、娘、子、の、家、庭、教、育、は、頗、る、罷、め、た、り、し、も、學、校、に、は、送、ら、さ、り、き、され、ば、盲、目、以、來、娘、子、に、口、授、し、て、筆、記、せ、し、め、或、は、外、國、語、を、讀、ま、し、め、て、聞、か、ん、と、せ、し、に、英、語、の、筆、記、は、太、た、困、難、な、ら、ざ、り、し、が、外、國、語、の、朗、讀、は、非、常、る、難、事、に、し、て、長、女、ア、ー、ン、は、美、人、と、雖、も、口、訥、に、し、て、讀、む、に、便、あ、ら、ず、他、の、二、娘、を、し、て、か、わ、る、が、わ、る、希、臘、拉、典、伊、太、利、西、班、牙、佛、

年 晩

蘭西等の書籍を讀ましめしに、娘共は固より意味を解するにあらず、
 只だ發音するのみゐれば、讀書の慰快とては更らにゐく、而してミル
 トンは已れが無聊を破らんが爲め、成るべく多く讀ましめんとせし
 を以て、娘共は窃かに父を怨むの色もありきと傳ふ。既にして三娘と
 も金銀等の端縫を學ぶべく、或る工場に送られぬ、外國語を讀むの苦
 痛これよりなし。又たミルトンの婚姻を考ふるに、一として太だ幸福
 なるはなかりしが如し。即ち第一の婚姻は、妻自ら去りて父母の家に
 歸り、家道零落を以ての故に歸り來り、第二の婚姻は幾もあくして妻
 死し、第三の妻は能くミルトンに事へたりしと雖も、屢々前妻の所生
 を虐遇せりと云ふ。

容 丰

年 晩

ミルトンの容丰は如何なりしか、其の嘗て大學に在りし時、クリスト
 の貴女と呼ばれしと云ふを以てすれば、美少年なりしや疑なし。デョ
 ンソンの記する所によれば、薄鳶色を帯たる頭髮は中央に於て二分
 され、且つ長く垂れて肩にかゝれり。又たトーマス、ニユトンの
 記する所によれば、音聲は清冽にして、極めて明白ありきと云ひ、又た
 身体は長大ならずして、寧ろ常人よりも低かりきと云ひ。又たシャッ
 コツスの記する所によれば、容丰婦人に類し、眼は碧みかちなりき
 と云ふ。想ふに彼れ好んで劍を使ひ、頗る其の技に熟達したりきと聞
 けば、文弱の人はあらず。又た遂に盲せしに推知せらるゝが如く、其の
 り弱かりしと云ひ、又た遂に盲せしに推知せらるゝが如く、其の
 目は劍客の目の如く、又た遂に盲せしに推知せらるゝが如く、其の
 唯た近眼ありしや否は考ふ可らず。飲酒は量多からざりしも、強性の
 ものを辭せさりしが如し。

容 丰

別天の子曰く、ホマ一マ一以後二千一百六十五年にしてダントテあり、ダント。以て後今ま正に二。百二十年、亞洲と云はず、世界何國の文苑。に求めむるも、極樂墮落の後に繼あるを聞かず。大史詩は果してホマ一。

盲詩人終

明治廿七年五月九日印刷
 明治廿七年五月十三日發行

定價二拾三錢



著 作 人 長 澤 說

神田錦町三丁目一番地

發 行 人 杉 浦 榮 次 郎

神田錦町三丁目一番地政教社内

印 刷 人 熊 田 宜 遜

神田錦町三丁目廿五番地

印 刷 所 熊 田 活 版 所

神田錦町三丁目廿五番地

東京神田錦町三丁目一番地

發 行 所 政 教 社

